出口瑞月口述

霊界物語

如意宝珠

戌之巻

始

特50/245

出口瑞月口述

如意寶珠

戊之卷

〔靈界物語第二十三卷〕

天聲社發行

10946664

口述者　出口聖師

出口聖訓口述

映意

愛善會
51.12.16
宣教師養成所

天聖地發行

1094664

序文

またしても高姫物語かと、讀者の飽き玉うとは知り乍ら、是れも一つの經路として述べて置かねば、神靈界の經緯が判りませぬから、口述者もいや〳〵乍ら口にしました。併し親子の愛情や、堪忍の報いの尊き事は本卷に依りて、徹底的に分明する事と確信して居ります。幸ひに御愛讀の上幾分なりとも修養の資料とならば、口述者に取りて望外の欣幸とする所であります。

大正十一年舊五月十八日

於龍宮館　瑞月識

如意寶珠【戊の巻】(23) 目次

序文……頁
凡例……
總說……一

第一篇 南海の山

第一章 玉の露……三
第二章 副守嘱……二五
第三章 松上の苦悶……四四
第四章 長高說……六六

第二篇 恩愛の涙

第五章 親子奇遇……九一
第六章 神異……一一二
第七章 知らぬが佛……一三五
第八章 縺れ髮……一五八

第三篇 有耶無耶

第九章 高姫騷……一六七
第一〇章 家宅侵入……一八九
第一一章 難破船……二一四
第一二章 家島探……二三七
第一三章 捨小舟……二五五

第一四章 籠抜……二七八

第四篇 混線狀態

第一五章 婆と婆……二九九
第一六章 蜈蚣の涙……三二二
第一七章 黄龍姫……三三七
第一八章 波濤万里……三四九
靈の礎〔八〕……三六二

如意寶珠〔戊〕目次終

如意寶珠

【戊の卷】〔23〕

口述者　出口瑞月

筆錄者　松村眞澄
加藤明子
北村隆光
外山豊二

總說

一身上に關する大峠を一週日の前に控へたる舊五月十八日、離爲火の本卦、火天大有の枝卦を得たる瑞月は、天佑の下に漸く二十三卷の靈界物語を口述し了り、進んで雷天大壯の神業に奉仕せんと、身心を清め、生田の森の訪客の、息のまに〳〵口ずさむ。罪

も穢れも那智の瀧、心の駒形や、木枯氣分の秋彦始め、虻蜂取らずの泥坊が、心の底より悔悟して、神の惠みの糸筋に、曳かれて親子の再會や、魂をぬかれし高姫が、執着心のいと深き、心の瀨戸の家島やま、小豆ケ島に聳え立つ、國城山の巖窟に、バラモン教の花形役者、蜈蚣姫と面會の珍物語、古今混同、不可解至極の頭腦の記憶を辿りつゝ蒲團の上に横たはり、日本一の吉備團子、ムシヤ〳〵喰ひ〳〵述べ了る。

大正十一年舊五月十八日　　龍宮舘にて　瑞月識

第一篇　南海の山

第一章　玉の露（七一三）

錦の宮の御經綸
經と緯との機を織る
姫の命の神勅を
玉照彦や玉照の
國依別や玉治の
四方に傳ふる宣傳使
大臺ケ原の峰つづき
別の命は神德も
深谷川の畔をば
日の出ケ岳より流れ來る
飛沫を飛ばす千仞の
青葉滴る木の茂み
足を休らふ折柄に
谷の絶景眺めつゝ
後振り返り眺むれば
追々近付く宣傳歌

草鞋脚絆の扮裝に　　金剛杖に饅頭笠
二つの影はゆら〳〵と　　此方に向つて進み來る。

國依別『玉治別さん、あなたも隨分永らく無言の行をやつて居ましたネー。若彦の宣傳使が熊野の瀧で荒行をやつて居ましたが、どうでせう、まだ依然として繼續して居るでせうか』

玉治別『私も實は若彦さんに會ひたいので、やつて來た途中、ゆくりなくも貴方にお目にかゝり、樣子を伺ひたいと思つた所です』

國依別『玉野姫さんが、あれ丈の御神業を遊ばしたのだから、若彦の宣傳使も聞いたら大變に喜ぶ事でせう。それに就ては何時までも紀の國路に居つて貰ふ譯にはゆかないから、實は言依別命樣の内命を奉じて、お迎へに來たのですよ』

玉治別『私も堅い秘密を守り、玉能姫の御神業を口外する事は出來ないのだが、貴方と二人の中だから云つても差支あるまいが、併し乍ら惡靈は我々の身邊を附け狙ふて居るから、迂濶した事は云ひますまい。……時に彼の宣傳歌はどうやら三五教らしいですな。何人か、近寄つて來る迄、此絶景を眺めて待ちませうか』

國依別『ヤアもう顏が判然する程近寄つて來ました。兎も角待つ事にしませう』

斯く言ふ折しも、宣傳歌は俄に歌んで、二つの笠追々と、木の茂みを分けて近寄つて來た。見れば魔我彦、竹彦の兩人、二人の端座せるに驚いた樣な聲で、

魔我彦『ヤア貴方は玉治別、國依別の宣傳使で御坐つたか。何れへ宣傳にお出でになる御考へですか』

國依別『誰かと思へば、魔我彦さんに竹彦さん。あなたこそ何方へ、何用あつて御出で

になります。言依別の教主より御命じになつたのですか。此紀の國の方面は若彦の宣傳區域と定つて居る。其處へ貴方がお出でになるのは、チット合點が行きませぬ」と問はれて魔我彦稍口籠り、手持無沙汰の樣な顏付して、

魔我彦「ハイ……私は宣傳に來たのでは有りません。熊野の瀧へ、罪穢れを洗ふ爲に荒行にやつて來たのです」

玉治別「遙々斯んな所まで荒行に來なくても、聖地には立派な那智の瀧が落ちて居るぢやありませぬか」

魔我彦はソワ〳〵し乍ら、

魔我彦「なんと、天下の絶景ですな。綠渦る木々の梢と云ひ、此谷川の水音と云ひ、實に勇壯ですなア」

と成るべく話を外へ轉ぜようと努めて居る。玉、國の二人は其意を察し、ワザと忘れた樣な風をなし、

玉治別「流石は大臺ケ原に源を發した丈あつて、隨分に立派な流れです。あの溪川の巨岩怪石に水の嚙み付いて、水煙を立て、白銀の玉を飛ばす光景と云つたら、實に天下の絶勝です。斯う云ふ所にせめて三日も遊んで居れば、生命が延びるやうな氣が致しますワイ」

魔我彦は恐相に谷底を覗き見て、驚いた樣に、

魔我彦「ア、大變々々」

と足掻をする。玉、國の二人は其驚きに何事か大事の突發せるならんと、慌て谷底を覗く。魔我彦は竹彦に目配せし乍ら、全身の力を籠めて二人の背後よりドッと押した。何

條堪るべき、二人は千仞の谷間に風を切つて顚落した。木々の青葉は追々黑ずんで、太陽は高山の頂きに姿を隱し、黃昏の空氣四邊を壓する。

魔我彥『アハ、、、、何程立派な宣傳使でも、斯うなつては駄目だ、玉、國の兩人、言依別の敎主に巧く取り入り、變性男子の系統の高姫さんに揚壺を喰はし、若彥の女房……元のお節や杢助の女つちよに御用をさせる樣にしよつたのは、皆此奴等の企みだ。是れから先、生かして置けば、どんなに邪魔をしやがるか分つたものぢやない一つはお道の爲、國家の爲ぢや。竹彥、巧妙く行つたぢやないか』

竹彥『俄に其處らが暗くなつて來て分りませぬが、うまく寂滅したでせうか。萬一此中の一人でも生き殘つて居よつものなら、忽ち陰謀露顯、我々は到底此儘で安樂に神樂に參加する事は出來ますまい』

魔我彥『アハ、、、、そんな取越苦勞はするものでない。斷崖絕壁屹立した、岩ばかりの所へ落ちたのだから、體は忽ち木葉微塵、こんな者が助かるなら、それこそ煎豆に花が咲くワ。アハ、、、』

と心地よげに笑ふ。

竹彥『夫れでも煎豆に花の咲く時節が來ると、神樣が仰有つた以上は、油斷がなりませぬぞ』

魔我彥『そりや比喩事だよ。そんな事を心配して居て思惑が成就するか。高姫樣を表面へ出さねば、到底五六七の神政は完全に樹立するものでない。我々は天下國家の害毒を除いた殊勳者だ。萬一一人や半分生き殘つて居つて不足を言つた所で、肝腎の高姫さんの勢力さへ旺盛ならば何でもない。勝てば善軍、敗くれば魔軍だ。何程平

等愛の神様の教でも力が肝腎だ。力が無ければ國祖國常立大神様でも、むざ〳〵と艮へ押籠められなさるのだから、兎も角我々は勢力を旺盛にし、部下を多く抱へ、一方には害物を除却せねばならぬ。攝受の劍と折伏の劍は、平和の女神でさへも持つて居るのだから……』

竹彦『こんな宣傳使の二人位葬つた所で、肝腎の言依別命が頑張つて居る以上は何にもならぬぢやないか。根本的治療を施さんとすれば、先づ言依別を第一の强敵と認めねばなるまい』

魔我彦はニタリと笑ひ、

魔我彦『天機漏らす可からず。我神算鬼謀、後にぞ思ひ知らるゝであらう』

竹彦『大樹を伐らんとする者は、先づ其枝を伐るの筆法ですかな』

魔我彦『音高し〳〵。天に口、壁に耳、モウ此話は唯今限り言はぬ事にせう。是れから熊野の瀧へ下り、若彦に會つて其上に分別をするのだから、ウッカリ喋舌つてはならないぞ。お前は表面俺の隨行者となつた心持で、何を若彦が尋ねても、知らぬ存ぜぬの一點張で居るが宜からうぞ』

竹彦『委細承知しました。併し乍ら私の副守護神が喋つた時は如何しますか』

魔我彦『そんな副守護神を何時までも抱へて居る樣な奴は、忽ち……ムニャ〳〵』

竹彦『忽ち……の後を瞭然聞かして下さい』

魔我彦『そんな事聞く必要が何處に有るか』

竹彦『我身に係はる一大事、どうも意味有り氣なお言葉でした。猿の小便ぢやないが、キに懸つてならない。それを聞かねば、私も一つの考へがある』

魔我彦『ハテ困つた事を言ひ出しやがつたものだ』

竹彦『こんな事なら竹彦を連れて來なんだがよかつたに……併し乍ら二人の奴を、谷底へ轉るのには、一人では都合好う行かず……アーア一利あれば一害ありだ。肝腎の處になつて竹彦の副守護神が發動し、斯んな事を素破抜かうものなら、高姫も・魔我彦一派も、夫れこそ大變だ。アーア後悔しても仕方がない。……と云ふ樣な貴方の心理狀態でせう。御心配なさいますな。私も同じく共謀者だから滅多に拙劣な事は申しませぬ。併し國依別、玉治別の亡靈が貴方や私に憑依して喋つた時は、コリヤ例外だから仕方がない、アハ、、、、』

と氣樂相に笑ひ轉ける。魔我彦は双手を組み、蒼白な顏になつて、肩で息をし乍ら思案に暮れて居る。夜の帳はます〳〵濃厚の色を增し、遂には相互の姿さへ闇に沒して了つた。木々の梢を揉む暴風の音、何となく騷がしく、陰鬱身に迫り、鬼哭啾々恰も根底の國に獨り彷徨ふ如き不安寂寥を感じた。二人は互に負ん氣を出し、何となく心の底の恐怖を抑へ、强い事を話し合つて、此寂しさと不安を紛らさうとして居る。風はますます烈しく、夜は追々更けて來る。女を責める樣な小猿の聲、彼方にも此方にも、キヤア〳〵と聞えて來るかと思へば、山岳も震動する許りの狼の聲刻々に高まり來る。青白い火は闇の中よりボツと現はれ、ボヤ〳〵と燃えては消え、燃えては消え、二人の身邊を取り卷き、遂には頭上を唸りを立てゝ燃え狂ふ。二人は目を塞ぎ、耳を詰め、頭抱へて大地にかぶり付いて了つた。首筋の邊りを、誰ともなく氷の如うな手で撫でるものがある。頭の先から睾丸までヒヤリと氷の如き冷たさを感じて來た。竹彦は慄い聲を出して、

竹彦『のー恨めしやなア。如何に魔我彦、騙し討ちとは卑怯未練な奴。モウ斯うなる上は汝が素つ首を引抜き、根の國底の國に落して呉れん。覺悟せーよ』

と暗がりに霊懸りをやり出した。魔我彦は、

魔我彦『オイ竹彦、厭らしい事をするものでない。チッと落着かぬか。そりや貴様、神經だ。今から發狂して如何なるか。チト氣を大きう持たぬかい』

竹彦『何と云つても此恨み晴らさで置かうか……押しも押されもせぬ宣傳使の玉治別、國依別を亡き者にせうと企んだ、汝の心の鬼が今此處に現はれ、竹彦の肉体を借つて讐を討つてやるのだ。其方も今迄高姫の部下となり、變性女子を苦めよつた揚句猶飽き足らいで、我々兩人を谷底に突き落し殺すとは、極惡無道の疵者。只今幽界の閻魔の廳より命令を受けて、汝を迎へに來たのだ。サア最早逃るゝに由なし。尋常に覺悟を致せ。花は三吉野、人は武士だ。せめてもの名殘に潔く散つたがよからう』

と冷たい手で首の周圍を撫でまはす。青い火は燃えては消え、燃えては消え、ブン〳〵と唸りを立てゝ魔我彦の周圍を飛び廻る。猿の聲、狼の聲は刻々に烈しくなつて來る魔我彦は餘りの恐さに魂消え、其場に人事不省になつて了つた。竹彦も亦其場にバタリと倒れて、後は風の音のみ。やがて下弦の月は研ぎすました草刈り鎌の樣な姿を現はし熊野灘から浮上り、二人の姿を怪しげに覗いて居る。夜は漸くにして明け放れた。小猿の群、何處ともなく兩人の前に飛び來り、足の裏を掻き、顏を掻いた。其痛さに氣が付き、兩人は期せずして一度に起きあがつた。

魔我彦『アヽ夜前は大變な恐ろしい目に遇うた。お蔭で新しい日天樣が出て下さつて、

稍心強くなつて來た。これと云ふも全く日の出神樣のお助けだ。月の御魂と云ふものは出たり出なかつたり、大きうなつたり、小さくなつたり、まるで變性女子の樣なものだ、チッとも當になりやしない。天地から鑑を出して見せてあるぞよ……と仰有つたが、本當に愛想がッキの神ぢや。何時も形も變らず晃々と輝き給ふのは日の出神樣ばかりぢや。それだから俺は日の出神の生宮でなければ夜が明けぬと云ふのだ。月の御靈なんて、精神の定らぬ事は、天を見ても分つて居るぢやないか。それに就て坤の金神ぢや。未や申と云ふ奴は碌な奴ぢやない。紙を喰つたり、人を搔きまはしたりする奴だよ」

竹彦「本當にさうだなア。猿の奴惡戲しやがつて、そこら中を搔きむしりやがつた。此方が吃驚して起きるが最後、一目散に逃げて了ひやがつたぢやないか。是れもヤッパリ坤の金神の力の無いと云ふ證據だ。アハ、、、」

魔我彦「併し昨夜の兩人は如何なつただらうかなア」

竹彦「どうも斯うもあるものか。人の體に幽靈となつて憑つて來やがつた位だから、心配は最早有るまい」

魔我彦「そらさうだ。青い火を點して、バッ〳〵とアタ煩雜い、出て來やがつて、思ひ切りの惡い奴だなア。サアこれから若彦の居所を訪ね一つの活動をするのだ。グヅグヅして居ると險難だから、早く目的地點まで往かう」

と先に立ちスタ〳〵と坂路を、又元の如く蓑笠を着け、金剛杖を突いて、ケチン〳〵と音させ乍ら岩路を下つて行く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

谷底には一人の男、赤裸となつて水行をやつて居た。そこへ薄暗かりに二つの影、青淵へ向つてドブンと許り落ち込んで來たものがある。男は驚いて手早く二人を救ひ上げイロ〳〵と人口呼吸を施したり、指を曲げたりして蘇生せしめた。

男「モシ〳〵あなたの服裝を見れば、夜陰にて確には分りませぬが、宣傳使の樣に見えますが、一体どなたで御座いますか」

國依別「惡者に突き落され、思はず不覺を取りました。其刹那、我身は最早粉碎の厄に遭うたものと覺悟をして居ましたが、よう助けて下さいました」

玉治別「私も實は宣傳使です。此れ丈澤山の岩が並んで居るのに、少しの怪我もなく此青淵へうまく落込んだのも、神樣のお蔭、又貴方樣のお助けで御座います。此御恩は決して忘れませぬ」

男「確かに分らぬが、お前さんは何處ともなしに聞覺えの有る聲だ。玉治別さんに國依別さんぢやありませぬか」

と問はれて二人は、

玉、國「ハイ左樣で御座います。さうして貴方は何れの方で……」

と皆まで聞かず男は、

男「アヽそれで安心致しました。私は初稚姫樣のお指圖に依つて、言依別の教主の承諾を得、此谷川へ、何故か急に派遣され、水行をしかけた所へ、あなた方が落ちて來られたのです。モウ少し私の來るのが遲かつたならば大變な事でした。私は杢助ですよ」

と聞いて二人は、安心と喜悅の念に堪へず、杢助の體に喰ひついて、嬉し泣きに泣くの

であつた。

杢助『隨分暗い夜さだが、其二人の聲で少しも疑う餘地はない。斯樣な所に長らく居つては面白くない。今回の私の使命はこれで終つたのだらうから、どつか平坦な所へ行つて、詳しう話を承はりませう。何を言つても此谷川の水音では、十分の話が出來ませぬ』

と云ひつゝ、闇に白く光つた羊腸の小徑を、探り〳〵下つて行く。路が木の蔭に遮られて見えなくなると、白い白狐の影一二間前をノソ〳〵と歩む。杢助は其跡を目當てに七八丁許り降り、平たき岩の上に腰をおろし、

杢助『サア〳〵御二人さん、此處でゆつくりと夜明けを待ちませうかい』

二人は『ハイ』と言ひ乍ら、濡れた着物を脱いで、一生懸命に絞り直し、岩にバッと擴げて乾かして居る。晝の暑さに岩は燒けたと見え、非常な暖かみがある。着物は少時の間に元の如く乾燥した。

國依別『天道は人を殺さずとはよう言つたものだ。何處も彼も夜露で冷やかうなつて居るのに、此岩計りは全然ストーブの樣だ。日輪樣もお上りなさらぬのに、着物が乾くと云ふ事は珍らしい事だ。これもヤッパリ神樣の御惠だらう。サア皆さん、神言を奏上致しませう』

と茲に三人は天地も搖ぐばかりの大音聲を發して、スガ〳〵しく神言を奏上し、宣傳歌を歌つて、暫く夜明けを待つ事にした。夜は漸くに明け放れ、木々の梢に置く露に一々太陽の光宿つて、恰も五色の果實一面に實のるが如く麗はしくなつて來た。

玉治別『スンデの事で、玉治別も魂の宿換する所だつたが、東天には金烏の玉晃々と暉

き玉ひ、一面の草木には我輩の分身分魂、空間もなく憑依して居る。ヤッパリ玉治別の宣傳使に限りますよ。なア李助さん」

李助「アハ、、、、體や着物が燥やいだと見えて、徐々燥やぎかけましたなア」

國依別「オイ玉さん、そんな氣樂な事言つてる時ぢやないぞ。昨夜の讐を討つと云ふ……そんな氣は無いが、併し我々二人にあゝ云ふ非常手段を用ひた以上は、何かこれには深い計略が有るに違ない。餘程これは考へねばなるまいぞ。李助さん、どうでせう」

李助「さうだ。グヅ〳〵して居る時ではない。餘程注意を拂つて居らねば、此邊は某々等の陰謀地だから……。さうして其惡者は誰だい。名は分つて居ますかなア」

玉治別「分つたでもなし、分らぬでもなし。他人の事は言はぬが宜しからう」

國依別「マガな隙がな我々の行動を阻止せんと考へて居るマガツ神の容器でせう。何れ心のマガつた奴に違ありますまい」

玉治別「惡人タケ〳〵しい世の中だから、誰だと云ふ事は、マア止めにして推量に任しませうかい」

李助「モクスケして語らずと云ふ御兩人の考へらしい。ヤア感心々々。それでこそ三五教の宣傳使だ。今迄の二人に加へた惡虐無道を無念には思つて居ませぬか」

玉治別「過越苦勞は禁物だ」

國依別「刹那心だ。綺麗さつぱりと谷川へ流しませう。天下の政權を握る內閣でさへも敵黨に渡して花を持たす志士仁人的宰相の現はれぬ時節だから……アハ、、、……マア此岩の上でカトウ約束をして、李助內閣でも組織し、熊野の瀧へ政見發表と出

かけませうかい』

杢助外二人は簑、笠、金剛杖、草鞋、脚絆に小手脛當て、宣傳歌を歌ひ乍ら、熊野の瀧を指して進み行く。

（大正一一・六・一〇　舊五・一五　松村眞澄錄）

第二章　副守　囁（七一四）

罪も穢れも那智の瀧、洗ひ流した若彦は、心もすがすがしく三五教の教理を遠近に傳ふ可く、普陀落山の麓に舘を造り、教を四方に布きつゝあつた。門を叩いて、

『賴まう〳〵』

と訪ふ二人の宣傳使がある。門番の秋公、七五三公は此の聲に眠りを醒まし、大欠伸をしながら、

七五三公『オイ秋公、誰だか門外に訪ふ人がある。早く起きて開けてやらないか』

秋公『夜も碌に明けてゐないのに、此の門開ける必要があるか。少し時刻が早いから、マア一寢入したがよからう』

門を叩く聲益々忙はしい。七五三公は夜具を被つた儘、

七五三公『オイ／＼開けるのは秋公の役だ。早く起きぬかい』

秋公『夫程喧しく言ふなら、貴樣開けてやれ』

七五三公『オレは其名の如くしめる役だ。愚圖々々して居ると、又若彦の大將からお目玉を頂戴するぞ。エー仕方の無い奴だ』

と寢巻の儘、佛頂面を下げて片足に下駄、片足に草履を穿き、三尺帶を引摺り乍ら、門をガラ／＼と開いた。二人は丁寧に會釋し、

『若彦の宣傳使は御在宅ですかな』

七五三公『そんな難かしいことを言つて解るかい。居るか、居らぬかと云ふのか。さうしてお前は何と云ふ宣傳使だ』

男『ハイ私は魔我彦、外一人は竹彦と云つて三五教の宣傳使です。大神樣の御命令に依つて、遥々參つたのですから案内して下さい』

七五三公『曲つたとか、曲らぬとか、案内とか、門内とか、お前の言ふことは全然譯が分らぬ。そんな英語を使はずに俺達に分るやうに云つて呉れ』

魔我彦『アハ、、、、譯の分らぬ門番もあつたもんぢやなア。こんな奴が門番して居る位だから、大抵若彦の御手並も分つてゐるワイ』

七五三公『一寸待つて呉れ。今お前は此家の御主人を若彦と云つたなア。何故若彦さんと言はないのだ。そんな無茶なこと云ふ奴は、此の門は通されぬのだ。大方厩谷ケ岳の蜈蚣姫の乾兒だらう。三五教の宣傳使だなんて、うまく化て來たのではないかな。……オイ秋公、貴樣起きて來い。大變な奴がやつて來居つたぞ』

秋公は此の聲に驚いて、寢卷の儘此場に現はれ來り、

秋公『大變な奴とは此奴か。如何したといふのだ』

七五三公『此方の主人を若彦なんて呼付けにしやがるものだから、むかつくのだよ』

秋公『それはむかつくとも、オイ何處の奴か知らぬが今日は歸つて呉れ』

魔我彦『其方は謂はば若彦の門番でないか。大神樣の御命令で來た吾々を、通すの通さぬのと云ふ權利があるか。早く案内を致せ』

と稍怒りを帶びた語氣で呶鳴りつけた。二人は頭を掻き乍ら、

秋公『マア是から吾々門番は手水を使ひ、着物を着換へ、朝飯を食つて悠くりと案内をしてやるから、それ迄其處に待つてゐるが好いワイ』

竹彦『魔我彦さん、廣いと云つてもたかが知れた若彦の屋敷、サア、行きませう』

と先に立ち奥に入る。若彦は涼しさうな薄衣を着て、庭先の掃除に餘念無く、箒目を正しく砂の上に畫いてゐる。

魔我彦『ア、彼れが何うやら若彦の宣傳使らしい。大將は朝早くから彼の通り、箒を以て園丁の役を勤めて居るのに、門番の奴グウ〳〵と寢やがつて、ボンついてゐやがる。ウラナイ教の北山村の本山でも、依然さうだつた。門番は威張るばかりで働かぬものだ。なア竹彦、貴樣も波斯の國でウラナイ教の門番をしてゐた時、依然さうだつたなア』

竹彦『そんなことを今頃に持ち出すものぢやありませぬぞ。さうしてウラナイ教なんて疾の昔に消滅して了ひ、今は吾々は立派な三五教の宣傳使だ。昔の門番を、こんな處で擔ぎ出されると吾々の估券が下る。そんな過去つたことを云ふのなら、青山峠

の谷間の突發事件を此處で開陳しようか』

魔我彦『シーッ』

竹彦『シーッとはなんだ。人を四足扱ひにしやがつて、シー〳〵云うと、死んだ奴が又恨めしやーナァーとやつて來るぞ。緣起を祝ふ神の道だ。四と九とは言はぬやうに慎んだがよからう』

と佇んで若彦の掃除を見乍ら二人が囁いてゐる。其の聲が耳に入り若彦は、箒を手にしながら兩人の姿を眺めて、

若彦『ア、貴方は魔我彦さんに竹彦さん、朝早くから、よくお入來になりました。どうぞ奥へ通つて下さい。一別以來の御話しも悠くり承はりませう』

魔我彦は儼然として、

魔我彦『私は玉照彦、玉照姫樣の御使として、遙々參つたもので御座います』

竹彦『謂はば神樣の御使、謹みて御聽きなさるがよろしからう』

と傲然と構へてゐる。若彦は腰を屈め、

若彦『何は兎もあれ、奥へ御通り下さいませ』

と先に立つ。二人は離れ座敷に招かれ、茶湯の饗應を受け、暫く打寛いで四方山の話に耽る事となつた。若彦は表に出で部下の役員信者と共に、神殿に朝の拜禮を爲し、一場の說教を了り朝飯を喰つて居る。侍女は膳部を拵へ、離れ座敷の二人の前に持運び、朝飯をすゝめて居る。若彦は朝餉を濟まし、衣紋を繕ひ、離座敷の二人が前に現はれ、

若彦『これは〳〵御兩人樣、長らく御待たせ致しました。遙々の御越し、何の御馳走も無く鹹に濟みませぬ』

魔我彦『三五教の教理は一汁一菜と云ふ御規則で御座る。それにも關はらず、イヤもう贅澤な御馳走に預りました。聖地に於ては到底玉照彦様でも、こんな御馳走は見られたことも御座りませぬ。併し乍ら折角の御志、無にするも如何かと存じ、快く頂戴致しました。アハ、、、』

若彦『吾々も三五教の宣傳使、一汁一菜の御規則はよく守つて居ります。併し乍ら今日は神様の御入來ですから、神様に御馳走を奉つたのです。魔我彦さんや、竹彦さんに御上げ申したのでは御座らぬ。貴方は神様に上げたものを、氣の毒だから御食れましたと仰有つたが、神様の分まで御食りになつたのですか』

と竹篦返しを喰はされ、二人はギヤフンとして圓い目を剝く。

魔我彦『今日吾々の參つたのは大神様の御命令、玉照彦、玉照姫の二柱の神司より、御神慮を傳ふ可く出張致しました。貴方は聖地の大變を知つて居りますか』

若彦『聖地は無事安穏に神業が榮えて居るぢやありませぬか』

魔我彦『さて〳〵貴方は長らく聖地を離れてゐるから解らぬと見えるわい。貴方の御存知の杢助と云ふ奴、全然聖地へ入り込み、初稚姫の少女の言ふ事を楯に取り、横暴を極め、誰も彼も人心離反し、今に大變動が起らんとして居る。それで高姫さんも非常に御心配を遊ばして御座るのです』

若彦『さうすると貴方は高姫さんの旨を奉じて來られたのか、或は言依別の教主様の旨を奉じて御入來になつたのか、それから第一番に聽かして貰ひませう』

竹彦『そんな事は如何でも好いぢやないか』

と言はんとするを魔我彦は周章て押し止め、

魔我彦『コレ〳〵竹彦さん、お前さんは約束を守らぬか。お前さんの言ふべきところでない、謂はば從者ぢやないか』

竹彦『從者か何か知らぬが依然表面は魔我彦と同格の立派な宣傳使だ。餘り偉さうに言つて貰ひますまい。青山峠の絹頂は何うですな』

と顏を覗き込む。

魔我彦『青山に日が隱らば烏羽玉の夜は出なん。朝日の笑み榮え來て、拷綱の白き腕、淡雪の若やる胸を、素手抱き手抱きまながり、眞玉手玉手さし卷き、腿長にいほしないせ、豐御酒奉らせ。アハヽヽ』

と笑ひに紛らす。

竹彦『ヘン、うまい處へ脫線するワイ』

魔我彦『沈默だ』

若彦『李助が何うしたと言ふのですか』

魔我彦『李助はお前さんを紀州下りまで追ひやつて置き、お前の女房玉能姫をうまく抱き込み、聖地へ連れて行き、言依別の命に密と〇〇させて、それを手柄に威張つて居るのだ。それが爲に聖地の風紀は紊れ、「町内で知らぬは亭主ばかりなり」と云ふ事が突發して居ますよ。お前さんは李助や、言依別を何と思ひますか。肝腎の女房を〇〇されて、それで安閑としてゐるのですかな。高姫さんが大變に憤慨なされて「ア、若彦さんは氣の毒ぢや、何卒一日も早く此事を知らして上げ、私と一緒に力を協して聖地を改革せねばならぬ」と仰有つて、錦の宮に御願ひを遊ばしたところ、玉照彦、玉照姫の神司に大神が御降臨遊ばし「不屈至極の言依別、今日より其

職を免じ、高姫に一切萬事を委任する。就ては李助を叩き出し、若彦さんを總務にするのだから早く聖地へ歸つて貰へ」との有り難き御言葉、それ故吾々は遙々と參りました」

若彦「それは御苦勞でした。併し乍ら貴方の仰有る大變とは、そんなものですか。それはホンの小さい問題ぢやありませぬか。例令玉能姫が○○されたと言つても、吾々さへ默つて居れば濟むことだ。其の位な事が、何大變であらう。アハヽヽヽ」

と手も無く笑ふ。魔我彦はキツとなり、

魔我彦「これは怪しからぬ。自分の女房を○○され乍ら平氣で笑うてゐるとは、無神經にも程度がある。イヤ、貴方は玉能姫以上のナイスが出來たので、これ幸ひと思つてゐるのでせう」

若彦「私は神界に捧げた身の上、玉能姫を措いて他に女なぞは一人もナイスだ。アハヽヽ」

と木で鼻を擦つたやうに笑つて取り合はぬ。

魔我彦「それよりも未だ〳〵一大事がある。如意寶珠や、紫の玉や、黃金の玉を隱した張本人は言依別命だ。可愛想に黑姫さんや、龍國別、鷹依姫其他の連中は、玉探しに世界中へ出て了つた。さうして言依別の敎主は何でも目的があつて、自分一人で何處かへ隱して了ひよつたのだから、何處までも詮議立をしなくてはなりませぬ。何を云つても玉能姫を○○するために、お前さんを斯んな遠國へ、李助と諜し合せて追ひやるやうな代物だからなア」

若彦「アヽさうですか、私は言依別樣が何をなさらうとも、神界に仕へて居る方だから

少しも異存は申しませぬ。絶對服從ですから』

魔我彦『服從も事に依りますよ。些と冷靜に御考へなさい。天下の大事ですから。敎主一人と天下とには換られますまい』

若彦『彼の賢い扱け目の無い玉治別や、國依別が附いて居るのですから、滅多なことはありますまい。もしも左樣なことがあれば、屹度知らして來る筈になつて居るのですから』

竹彦『玉治別や國依別は、モウ現世には……』

と言ひかけるのを、魔我彦は『シーッ』と制し止めた。

竹彦『又人をシーなんて馬鹿にするない。シー〳〵死骸、死人、しぶとい、知らぬ神に祟り無し。死んだがマシであつたかいなア』

と首を篦棒に振り、長い舌を出してゐる。魔我彦は心も心ならず、

魔我彦『若彦さん、此男は些と逆上してゐますから、何を云ふか解りませぬ。チツとキ印ですから其のつもりで聽いて下さい』

若彦『玉治別と國依別さんの消息は御存知でせうな』

魔我彦『……』

竹彦『此の竹彦は知つても知りませぬ。併し乍ら副守護神が能く知つてゐますよ』

魔我彦は矢庭に兩手を組み、竹彦に向つてウンと一聲、

魔我彦『副守の奴、除けーッ』

と呶鳴り立てた。

竹彦『ウ、、油斷を致すと谷底へ突落されるぞよ。一旦谷底へ落した上で神が救けて、

誠の御用を致さすぞよ。此世は神の自由であるから、人間のうまい計畫は成就致さぬぞよ。蛙は口から、われとわが手に白狀致さして面の皮を引剝くぞよ」

魔我彦「下れ〳〵、下り居らう。其方は野天狗であらう」

竹彦「野天狗でも何でも可いわ、谷底ぢや、押も押れもせぬ三五教の宣傳使でも、矢張押されて谷底へ落ちてアフンと致すことがあるぞよ。今に上が下になり下が上になるぞよ。神が表に現はれて善と惡とを立別るぞよ」

魔我彦「エー喧しい野天狗だ。下れと云つたら下らぬか」

竹彦「ウヽ、若彦殿、氣をつけたがよからうぞよ。惡の誘惑に乘つてはならぬぞよ。何程うまいこと申して來ても、神に伺うた上でなければ、聞いてはならぬぞよ。マガ〳〵」

魔我彦「モシ〳〵若彦さん、困つた邪神が憑依したものですなア」

若彦「イヤ邪神でもありますまい。大方此の守護神の言ふことは、事實に近いやうですよ。國依別、玉治別の宣傳使は、若しや或はマガタケル彦に谷底へ突き落されたのではありますまいかな」

竹彦「ウヽ、流石は若彦の宣傳使だ。汝の天眼通、天晴れ〳〵」

魔我彦は顏蒼白め、ソロ〳〵遁腰になつて此場を立去らうとする。

若彦「マア魔我彦さん、悠くりなさいませ。天が下には敵も無ければ味方も有りませぬよ。神樣が善惡は御審判き下さいますから、吾々は何事が起らうとも惟神に任して居れば好いのですよ。サア、お茶なつと召上りませ」

と茶を汲んで突き出す。魔我彦は身体ワナ〳〵と戰き出した。

斯る處へ召使のお光と云ふ女、あわただしく走り來り、

お光『只今三人のお客樣が見えました。何う致しませう』

若彦『表の奥の間へ御通し申して置け』

魔我彦『モシ〳〵其の三人の方と云ふのは、何んな御方で御座いますか』

お光『なんでも宣傳使樣のやうです。大變大きな御方が一人混つてゐられます』

魔我彦の面色はサッと變つた。竹彦は身体をブル〳〵と慄はせ乍ら、又神憑りになつて竹彦『それ來た〳〵、谷ぢや〳〵、玉ぢや〳〵、クル〳〵〳〵モク〳〵〳〵』と呶鳴り出した。若彦は、

若彦『コレお光や、四五人の男を此處へ招んで來てお呉れ』

『ハイ』と答へて、お光は表を指して姿を隱し、暫くありて甲、乙、丙、丁、戊の五人の大男を伴れて來た。

若彦『ヤア五人の男ども、私は表のお客さんに少し用がうるから、二人のお客さんを見放さないやうに、大切に保護をして居るのだよ。出口入口に氣をつけて惡魔の侵入せないように守つてあげて呉れ。遁げられては一寸都合が惡いからなア』

甲『ハイ何事もチャンと私の胸に御座います。御心配下さいますな』

若彦『何分宜しう賴む。モシ魔我彦さん、竹彦さん、私は表の客人に一寸會つて來ます何うぞ悠くりお茶でも上つて遊んで下さいませ』

と五人の男に目配せし、悠々と此塲を立つて表屋の方に姿を隱す。

（大正一一・六・一〇　舊五・一五　外山豐二錄）

第三章　松上の苦悶（七一五）

原野を遠く見晴らした若彦館の奥の間に招ぜられた三人の男は、杢助、玉治別、國依別であつた。

若彦『これはお三人樣、打ち揃うてよくも御入來下さいました。今も今とて貴方方の噂を致して居りました。呼ぶより誹れとはよう云つたものですなア』

杢助『言依別の敎主の命に依つて、紀の國へ急遽出張致しました』

若彦『言依別の敎主は矢張り相變らず勤めて居られますか』

杢助『これは又妙なお尋ね、敎主が變つてなるものですか』

若彦『高姫さんは何うなりました』

杢助『高姫さんは相變らず聖地で働いて居られます』

若彦『ハテナ』と思案に暮れる。

若彦『玉能姫は如何致しましたか』

杢助『玉能姫樣は初稚姫樣とお二人、錦の宮の別殿にお仕へになつて居ります。併し妙な事をお尋ねですな。誰か當館へ來た者がありますか』

若彦『ハイ、先程魔我彦、竹彦の兩人が參りました』

國依別は是を聞くより俄に肩を吊りあげ、何と無しに不穩な色を顏面に漂はした。

國依別『其の魔我彦は何處に參りましたか』

若彦『離れの座敷で休息して居られます』

杢助『アハヽヽヽ、これは妙だ。惡い事は出來ぬものだなア』

若彦『魔我彦が何を致しましたか』

杢助『イエ、人の心位恐ろしいものはありませぬ』

若彦『何だか、そは〳〵と四人は致して居りますので、これには深い様子のある事と思ひ、さつこにも逃げないやうに五人の荒男をもつて監守さして置きました。一体何んな事をやつたのです』

杢助は、青山峠の頂上より谷底へ玉治別、國依別を突き落し、殺害を企てた事を小聲に耳打ちした。若彦は倒れん許りに打ち驚き、

若彦『さこ迄も執念深き高姫一派の奸計。何うしても金狐、大蛇、惡鬼の守護神が退かぬと見えますな。何う致しませう。此儘追ひ歸すか、但は歸順させるか二つに一つの方法を執らねばなりますまい』

杢助『まア私に任して下さい』

と腕を組んでやゝ思案に耽る。暫くありて杢助は若彦の耳に口を寄せた。若彦は打ち頷き、此場を立つて離れ座敷に進み入り、五人の男に向ひ、

若彦『ア、皆の者御苦勞であつた。各自自分の部屋に歸つて休息して下さい。……魔我彦さん、竹彦さん、長らくお待たせ致しました。嘸お退屈でせう』

魔我彦『何卒お構ひ下さいますな。お客さんは何うなりましたか』

若彦『ハイ、ほんの近くの百姓が見えましたので御座います。何れも用をたして歸りました。何卒御悠くりとして下さい。併し一つ貴方にお願ひ仕度き事が御座います』

魔我彦『お願ひとは何事で御座いますか』

若彦『實は熱心な信者が病氣にかゝつて此舘に籠つて居りますが、何うも怪しい病氣で

すから、一遍貴方の御鎭魂を願ひ度いのです」

魔我彦「神德の充實した貴方がゐらつしやるのに、何うして私のやうな者がお間に合ひませうか」

若彦「あの病人は何うしても貴方の鎭魂を受けなくては癒らないのです。總てものは相緣奇緣と云うて、何程神樣の御神德だと云うても、意氣の合ぬものは到底効能がありませぬ。何卒貴方急ぎませぬから、お休みになつたら鎭魂を施して下さい」

魔我彦「承知致しました。一つ神樣に願つて見ませう」

若彦「早速の御承知、本人も喜ぶ事でせう。併し乍ら、何か物怪が憑いて居ると見えて晝は平穩です。夜分になつてから一つお願ひ申しませう」

魔我彦は傲然として、

「ハイ宜敷い」

と大びらに首を振つて居る。表の方には杢助、玉治別、國依別の三人小聲になりて、何事か話に耽つて居る。若彦は二人に向ひ、

若彦「些しく表に用が御座いますれば失禮致します。何卒御悠くりと今日はお休み下さいませ。今晩お世話にならなくてはなりませぬから」

と云ひ捨て立ち去る。後に二人は小聲になり、

魔我彦「何うも怪しいぢやないか。何うやら、杢助がやつて來て居るやうな氣がしてならぬ。まかり間違へば青山峠の陰謀が露見したのだなからうかなア」

竹彦「私も何だか心持が惡くなつて來た。何うぞして此處を逃げ出す工夫はあるまいかなア」

魔我彦『ひよつとしたら二人の奴、谷底で蘇生したかも知れないぞ。それなら大變だ。一つお前神懸をやつて見て呉れ』

竹彦は言下に手を組み、瞑目した。忽ち身体震動して、

竹彦『ウ、、、此方は入岐の大蛇の眷屬であるぞよ。今表に杢助、玉治別、國依別の三人が現はれて、今夜を待つて復讐せんとの企みをやつて居るぞよ』

魔我彦『それは大變です。何とかして助かる工夫はありますまいか』

竹彦『ウ、、、もうかうなる以上は、舘の周圍は荒男が取り卷き警戒して居る。力強の杢助は表に隱れて居る。もはや袋の鼠、兩人の身体は逃れる見込はあるまい』

魔我彦『ハテ、困つた事だ。何うしたら良からう』

と顏色を變へてまごつく。

竹彦『ウ、、、周章るには及ばぬ。先づ氣を落ちつけよ。かういふ時こそ刹那心が必要だ。何れ人を呪はゞ穴二つ、天に向つて唾したやうなものだ。自業自得だ、諦めて三人に命をやつたらよからう』

魔我彦は益々狼狽へ、

魔我彦『命惜さに我々は信仰もし、宣傳使もやつて居るのです。そんな事があつて耐るものですか。かういふ所を助けて下さるのが神様だ。何とかよいお指圖を願ひます』

竹彦『ウンウン、自業自得だ。仕方がない、今表に折伏の劍を三人が力限り研いで居るぞ。あの業物で、すつぱりとやられたら、二人の身體は見事梨割になるだらう、ウフ、、、』

魔我彦『何卒、我々二人を此處から救ひ出して下さい。もうこれきり改心を致しますか

ら……」

竹彦「ウンウンウン、先づ周章ずと日が暮る迄待つたらよからう。何程謝罪つた所で、これだけ大勢強い奴が取卷いて居るから何うする事も出來はしない。なまじいに逃げ隱れ致して、名もなき奴に命を取られ恥を曝すよりも、汝が持てる懷劍で刺違へて死んだがよからう。それが最善の方法だ」

魔我彦「この不安狀態がどうして今夜迄待てますか。また大切な一つの命を、さう易々と放る譯には行きますまい」

竹彦「ウ、、、この肉体も可愛さうなものだが、其方も可愛さうだ。併し玉治別、國依別の命を易々と取らうと企んだ張本人は魔我彦だから仕方がない、觀念致せ」

魔我彦「これが何うして觀念が出來ませう」

竹彦「ウ、、、命が惜いか、我身を抓つて人の痛さを知れ。貴樣が命の惜しいのも、玉國兩人が命の惜しいのも同じ事だ。併し乍ら、玉、國兩人は常から命が大切だと云うて居る位だから、死ぬのは嫌なに違ひない。それに引かへ貴樣は高姫と共に、日々烏の啼くやうに命は入らぬ、お道の爲なら假令どうなつても惜しくないと云うて居るぢやないか。命の無くなるのは貴樣の日頃の願望成就ぢや、こんな目出度い事は又とあるまい。アハ、、、」

魔我彦「貴方は何れの神樣か存じませぬが、ちと氣に食はぬ事を仰有る。お引取を願ひます」

竹彦「ウ、、、さうだらう、氣に食はぬだらう。尤もぢや、口先でこそ命はいらぬと云つて居つても、肝腎要な時になると、娑婆に未練の殘るのは人間として、普通一般

の當然の執着心だ。その執着心を取らなければ、誠の神業は成就致さぬぞ」

魔我彦「同じ事なら肉体を持つて御用を致し度う御座います。ア、いまつた事をした。何うしたらよからうかなア。日はだん〳〵と暮れて來る。愚圖々々して居れば何んな目に遇はされるか知れやしない、翼でもあれば、たつて歸るのだけれど」

竹彦「ウ、、アハ、、、、それ程命が惜しければ此方の申す樣に致すか」

魔我彦「命の助かる事なら何んな事でも致します。何うぞ早く仰有つて下さいませ」

竹彦「ウンウンウン、汝等兩人は庭前のこの松の頂上に登り、天津祝詞を一生懸命に奏上致せ。さうすれば天上より紫の雲をもつて汝の身体を迎へ取り、安全地帶に送つてやらう。何うぢや嬉しいか」

魔我彦「ハイ、助かる事なれば結構です。そんなら何時から登りませう」

竹彦「時遲れては一大事、半時の猶豫もならぬ。松の木を目蕓けて登つてゆけ。竹彦の肉体も共に登るのだぞ。ウンウンウン」

と云ひながら靈は元に歸つた。魔我彦は四邊キヨロ〳〵見廻し、人無きを幸ひ庭先の大木を命を的に猿の如くかけ登つた。竹彦も續いて頂上に登りついた。二人は一生懸命に天津祝詞を聲の限り奏上した。此聲に驚いて若彦を初め、杢助、玉、國其他の一同は松上の二人の姿を見て「アハ、、、」と笑ひどよめいて居る。二人は一生懸命汗みどろになつて惟神靈幸倍坐世を奏上して居る。杢助は態と大きな聲で、

杢助「サア、是から曲津彦と竹取別の兩人を料理して酒の肴に一杯やらうかい」

と雷の如く嗽鳴りつけた。魔我彦は是を聞き戦慄し、次第々々に慄ひ聲になり、遂には息も出なくなつて仕舞つた。竹彦は「ウ、、」と又もや松上にて神懸りを始めた。

魔我彦『貴方の御命令通り此處迄避難しましたが、あの通り杢助以下の連中が樹下を取り卷いて居ります。どうぞ早く雲をもつて迎ひに來て下さい』

竹彦『ウンウンウン、斯の如く濃厚な紫の雲、汝の身体を取圍んで居るのが目に入らぬか。活眼を開いて四邊を熟視せよ』

魔我彦『何うしても我々の目には見えませぬ』

竹彦『ウンウンウン、見えなくつても雲は雲だ。竹彦の肉体と手を繋いで天に向つて飛びあがれ。さうすれば摘み上げて此館より脱出せしめ、安全地帶に救うてやらう。男は決斷力が肝要だ。サア早く』

と促され、魔我彦は夢我夢中になつて竹彦の手を採り、一イ二ウ三ツと聲を揃へて一二尺飛び上つた途端に、松上より眼下の荒砂を敷き詰めた庭に眞逆樣に墜落し、蛙をぶつつけたやうにピリ〳〵と手足を慄はせ、人事不省に陷つた。若彦、杢助、玉、國其他の者は此光景に驚き、忽ち樹下に人山を築き、水よ水よと右往左往に慌て廻る。お光は手桶を提げ慌しく走り來る。杢助は直ちに水を含み、兩人の面部に息吹の狹霧を吹きかけ、漸くにして二人は唸りながら生氣に復し、四邊をキヨロ〳〵見廻し、玉治別、國依別の姿を見て『キヤッ』と叫び、又もや人事不省に陷つて仕舞つた。玉治別は魔我彦を、國依別は竹彦をひつ抱へ、奥の間深く運び入れ、夜具を敷いて鄭重に寢させ、神前に向つて天津祝詞を奏上し、更めて鎭魂を施した。漸くにして二人は息を吹きかへす。

玉治別『魔我彦さん、何うでした。隨分御心配なさつたでせう』

魔我彦『ハイ、誠に申譯のない事を致しました。何うぞ命だけは御猶豫を願ひます』

玉治別『人を助げる宣傳使がどうしてお前さんの命が欲しからう。お蔭で大變な修業を

さして貰ひました。併し此後はあんな危險な事は止めて貰ひたいものだ。天の眞浦の宣傳使が、駒彦、秋彦に宇津山郷の斷崖から雪中へ落されたよりも餘程險難でしたよ」

魔我彦は眞赤な顏をして俯向く。

國依別「竹彦さん、氣がつきましたか」

竹彦「ハイ、氣がつきました。惡い事は出來ませぬワイ。餘り成功を急いだものですから何分貴方方は高姫さんの御神業の妨害をなさる惡人だと信じきつて、あゝ云ふ無謀な事を致しました。併し乍ら魔我彦の精神は存じませぬが、決して竹彦はそんな惡人ではありませぬ。入岐の大蛇の邪靈が私に憑いてあんな事をさせたのですよ。何卒私を恨まぬやうに願ひます」

李助「隨分不減口を叩く男だな。併し乍らお前も是で惡は出來ないと云ふ事は分つたであらう」

魔我彦「私も肉体がやつたのではありませぬ。入岐の大蛇の眷族が憑つたのですからどうぞ神直日大直日に見直し聞き直しを願ひます」

李助「大体お前達は高姫の脫線的熱心に惚込んで居るから、そんな不善的な事を平氣でやつて、立派な御神業が勤まると思うて居るのだ」

魔我彦「何事も日の出神さんの御命令通りだと思つて、高姫さんの意志を一寸忖度して居る處へ守護神かやつて來て、靈肉一致、二人を谷底へ突落し、殺さうとしたのです。併し乍ら魔我彦の肉体は何も知りませぬ」

李助「玉治別、國依別の宣傳使は青山峠の絕頂から、あの深い谷間へつき落され、すん

での事で五體を粉碎するやうな目に遇はされても、お前達兩人に對し鵜の毛の露程も恨んで居ないのは實に感服の至りだ。お前達も此兩宣傳使の心を汲みとつて、少し改心したらどうだ。さうして改心を證明する爲に、今迄の高姫一派の計略を此處ですつかり自白したがよからう」

魔我彦『そればつかりは自白出來ませぬ、高姫さんから假令死んでも云うてはならないと口留めされ、私も萬刧末代、舌を抜かれても言はないと固く約したのですから』

李助『假令善にもせよ、惡にもせよ、まだ良心に輝きがあると見えて、約束を守ると云ふ心がけは見上げたものだ。俺達も是以上は最早追及せぬ。玉治別さん、國依別さんこの兩人を赦しておやりでせうなア』

玉治別『赦すも許さぬもありませぬ。何事も神樣の御經綸、我々に油斷は大敵だと云ふ實地の教育を與へて下さつたのですから、其お役に使はれなさつた御兩人に對し、御苦勞樣と感謝こそすれ、寸毫も不足に思つたり恨んだりは致しませぬ』

國依別『私も玉さんと同感です。魔我彦さん、竹彦さん、安心して下さい。當つて碎けよと云ふ事がある。此上は層一層親密にして、神界の御用を勤めようぢやありませぬか』

李助は立つて歌を歌ひ、しらけた此場の回復を圖つた。

李　助『大和河内を踏み越えて　漸々此處に紀の國の
青山峠の谷間に　言依別の御言もて
勇み進んで來て見れば　音に名高き十津川の
激潭飛沫の谷の水　衣類を脱ぎて眞裸體

ざんぶとばかり飛び込みて　御禊を修する折からに
樹々の青葉も追々に　黒ずみ來り天津日の
影は漸く隱ろいて　闇を彩る折からに
頭上をかすめて落ち來る　二つの影は忽ちに
青淵目がけて顚落し　人事不省になる瀧の
邊に二人を抱きあげ　よく〳〵見ればこは如何に
玉治別や國依の　別の命の宣傳使
青山峠の斷崖より　つき落されて此さまと
聞いたる時の驚きは　流石に豪氣の杢助も
胸に浪をば打たせつゝ　闇を辿りて漸々に

二人を伴ひ平岩の　麓に漸く近寄つて
其夜を明かし兩人に　樣子を聞けば魔我彥や
竹彥二人の惡戯と　聞いて再び胸躍り
深き仔細のある事と　此處に三人はとるものも
取敢ずして若彥が　館に訪ね來て見れば
思ひがけなき兩人が　離れ座敷でひそ〳〵と
深き企みを語り合ふ　善惡邪正の其報い
忽ち現はれ北の空　雲を拂つて照り渡る
北極星の動きなき　若彥さんが雄心に
再び動く三人連れ　魔我彥竹彥兩人は

虚實の程は知らねども　兎も角前非を心から
悔いしが如く見えにける　嗚呼頼もしや〳〵
仕組の糸に操られ　心にかゝりし村雲も
彌〳〵晴らす今日の宵　あゝ、惟神〳〵々々
御霊幸倍ましまして　鷹鳥姫が迷ひをば
晴らさせ給へ魔我彦や　竹彦一派の迷信を
朝日の曇榮昇るごと　照し明して三五の
道の誠を四方の國　國の内外の島々に
月日の如く明かに　照させたまへ天津神
國津神達八百萬　百の御伴の神達の
御前に頸根つきぬきて　遥に祈り奉る
慎み祈り奉る」

と歌ひ終つて兩人に向ひ、

李助「サア、魔我彦さん、竹彦さん、此李助と共に聖地へ歸りませう。若彦、玉治別、國依別は是より伊勢路に渡り近江に出で、三國ケ岳を探險して聖地へ歸つて下さい聖地には又もや高姫の陰謀が劃策されてあるから、李助は是より兩人を伴ひ、すぐ歸國致さう」

と云ふより早く忙しげに此館を立ち出た。魔我彦、竹彦は何となく心落着かぬ面持にて悄々後に従ひ聖地をさして歸り行く。

（大正一一・六・一〇　舊五・一五　加藤明子録）

第四章　長高說（七一六）

杢助と魔我彥、竹彥二人と共に竊に聖地に歸り、表戸を閉し暫らく外出せず、聖地の樣子を窺つて居た。玉治別、若彥、國依別の三宣傳使も密に聖地に歸り、國依別が館に深く忍び、高姬一派の陰謀を偵察しつゝあつた。神ならぬ身の高姬は此事は夢にも知らず、鬼の來ぬ間の洗濯するは今此時と、私かに聖地の役員信徒の宅に布令を廻し、緊急事件突發せりと觸れ込んで、錦の宮の八尋殿に集めた。

此日は風烈しく急雨盆を覆へす如く、雷鳴さへも天の東西南北に卷舌を使つてゴロツキ出した。斯かる烈しき風雨雷電にも屈せず、緊急事件と聞いて爺も婆も猫も杓子も、脛擦の立つ者は滿場立錐の餘地なきまでに寄り集まつた。此時高姬は烏帽子、狩衣嚴めしく神殿に進み、言依別の敎主、尻でも喰へと言ふ鼻息にて齋主を勤め、型の如く祭典を濟ませ、アトラスの樣な曼陀羅の面を講座の上に曝し、滿座の一同に向ひ、鬼の首を箆で搔き斬つた樣に得意氣に壇上に肩を搖り、腮を上下にしやくり乍ら、

高姬『皆樣、今日は斯くの如き結構なお日和にも拘らず、殘らず御參集下さいまして、日の出神の生宮も滿足に存じます。言依別の敎主は先日より少しく病氣の態にて引き籠られ、又杢助の總務殿は何處へかお出でになり、此三五敎の本山は首の無い人間の樣だ、二進も三進も動きが取れないと、大勢樣の中には御心配遊ばしたお方があつた樣ですが、日の出神の御神德は偉いものです。敎主が出勤せなくても、杢助其他の幹部宣傳使が居なくても、御神力に依つて、斯くの如く一人も殘らず參集して下さつたと言ふのは、未だ天道樣は此高姬を捨て給はざる證で御座いませう。杢

助總務の召集でも言依別の教主の召集でも、此八尋殿の建設以來、是だけ立錐の餘地なき迄お集まりになつた事は御座いませぬ。それだから神力が強いか、學力が強いか、神力と學力との力競べを致さうと神樣が仰有るのです。論より證據、實地を見て御改心なさるが一等です。時に緊急事件と申しまするのは外でも御座らぬ。我々日の出神の生宮、而も變性男子の系統の肉體、及び錚々たる幹部の御連中を差措き、たかの知れたお節の成り上りの玉能姫や、杢助の娘お初の如き者に、ハイカラの教主が大切なる御神業をソッと命令し、我々始め幹部の御歴々にスッパヌケを喰はすと言ふ事は、如何に御神業とは言へ、我々一同を侮辱したる仕打ちでは御座りますまいか。幹部役員は申すも更なり此處にお集まりの方々は何れも熱心なる三五教の信者樣計りで御座りませう、神樣のお仕組の御用を各々に致し度いばつかりで、地位財産を捨てゝ此處へ來乍ら、譯の分らぬ杢助一派の者に蹂躙されて、指を嘶へてアフンとして見て居ると言ふ事がありませうか。斯う見渡す所、大分立派な男さんも居られますが、貴方等は睾丸を提げて居られますか。實に心外千萬ではありますまいかな」

加米彦は滿座の中よりヌッと立ち上り、

加米彦「高姫さんに質問があります、何事も神界の御經綸は我々人間の容喙すべき所ではありますまい。如何に日の出神の生宮ぢやと仰有つても、神樣が高姫さんの命令に服從せよとは、何處の筆先にも書いてはありませぬ。日の出神呼ばはりは廢めて貰ひ度い。貴女こそ聖地及び神界の御經綸を混亂顚覆させる魔神の容器でせう」

高姫は講座より地團駄を踏み、目を釣り上げ、

高姫『誰かと思へば汝は秋山彦の門番加米彦ではないか。世界の大門開きを致す此高姫の申す事、たかが知れた一軒の家の門番が容喙すべき限りでない。すつ込んで居なされ』

と一口に叩きつけ様とする。加米彦は負ず氣になり、高姫の立てる壇上に現はれて一同を見渡し、

加米彦『皆さん、私は今高姫様の仰せられた如く、秋山彦の門番を致して居りましたが、然し乍ら高姫さんも大門の番人ぢやと只今自白されたではありませぬか。門番の分際として大奥の事が如何して分りませう。それに就いても私は秋山彦の館、即ち神素盞嗚大神、國武彦命様の御隱れ館の門番を致して居つた者、其時に冠島、沓島の鍵を應答なく盜んで行つて玉を呑み込んだ人があると言ふ事は、私が今申し上げずとも、皆さんは既に已に御承知の事と存じます。斯様なる權謀術數到らざるなき生宮さんの言葉が、如何して眞劍に眞面目に信ぜられませうか。皆様冷靜によく御考へを願ひます』

座中より『尤も〳〵』『賛成々々』『ヒヤ〳〵』『ノウ〳〵』の聲交々起つて來る。

高姫は烈火の如く、

高姫『今「ノウ〳〵」と言つたお方は此日の出神の前に出て來て下さい。我黨の士と考へます。サア早く此處へお越しなされ』

加米彦『恐らく一人もありますまい、私の説に對し「ノウ〳〵」と言つたお方は賛成の意味を間違つて言はれたのでせう。皆さん、失禮な申し分で御座いますが、中には老人や子供衆も居られますから、一寸説明を致します。「ヒヤ〳〵」と言へば

私の説に賛成したと言ふ事、「ノウ〳〵」と言へば賛成せないと言ふ事です。如何です。倘一度宜り直して貰ひませう。さうして不賛成のお方は「ノウ〳〵」と言つて下さい」

塲の四隅よりは「ヒヤ〳〵」の聲計りである。殊更大きな聲で「ノウ〳〵、然し高姫の説にはノウ〳〵だ」と附け加へた。高姫は口角泡を吹き乍ら、

高姫『皆さん、今となつて分らぬと言うても餘りぢやありませぬか、大切なるお實を隱されて、よう平氣で居られますな。第一言依別のドハイカラの教主は、杢助の樣な奴にチヨロまかされ、系統の生宮の高姫を疎外し、さうして其實をば何處かへ隱して仕舞つた。皆さんはそんな章魚の揚壺を喰はされた樣な目に遇ひ乍ら、平氣で御座るとは無神經にも程があるぢやありませぬか。何程言依別の教主が偉くても、杢助の力が強くても、神界の事が學や智慧で分りますか。昔からの根本の因緣、大先祖は如何なる事を致して居つたか、如何なる因緣で此世へ生れて來たか、日の出神の誠のお活動は如何なものか、龍宮の乙姫樣の御正体は如何かと言ふ明瞭な答へが出來ますか。モウ是からは錦の宮を始め此八尋殿は、及ばず乍ら此高姫が總監致します。玉能姫や初稚姫の女を選んで、大切な御用をさせると言ふ譯の分らぬ教主に隨喜渇仰して居る方々の氣が知れませぬ。チツと皆さん、耳の穴を掃除して日の出神の託宣を聞き、活眼を開いて實地の行ひをよくお調べなされ。根本の要を摑んだ日の出神の生宮を差措いて、枝の神の憑つた肉體に何が分りますか。こゝは一つ……誰の事でも無い、皆お前さん等の一身上に關する大問題、否國家の大問題です』

加米彦『只今高姫さんのお言葉に就いて異議のある方は起立を願ひます』

一同は殘らず起立し『異議あり〳〵』と叫んだ。

加米彦『皆さんの御精神は分りました。私の申した事に御賛成のお方は何卒何一度起立を願ひます』

高姫は隼の如き目を瞪り、各人の行動を監視して居る。壇下の信者は高姫に顔を睨まれ、起立もせず坐りもせず、中腰で居るものも澤山あつた。

加米彦『皆さんに伺ひますが、教主が神界の御命令に據つて、玉能姫さん、初稚姫さんに御用を仰せ付けられたのが惡いとすれば、まだ〳〵横暴極まる惡い事が此處に一つある樣に思ひます』

聽衆の中より『有る〳〵、澤山にある』と呶鳴る者がある。

加米彦『その職に非ざる身を以て、神勅も伺はず、教主の承諾も得ず、部下の役員を任免黜陟すると言ふ事は、少しく横暴ではありますまいか。黒姫樣、鷹依姫樣、龍國別樣、テーリスタン、カーリンスを聖地より追出したのは、果して何人の所爲だと思ひますか』

此時高姫は肩を斜に聳やかし乍ら、

高姫『加米彦さん、そりや何を言ひなさる。系統の生宮、日の出神が命令をなさつて、黒姫以下を海外諸國へ玉探しにお遣り遊ばしたのだ。何程言依別や初稚姫が偉いと言つても、日の出神には叶ひますまい。學や智慧で定た規則が何になるか。そんな屁理窟は神界には通りませぬぞや』

加米彦『これ高姫さん、お前さんは二つ目には日の出神だと仰有るが、そんな立派な神樣なら何故寶玉を隱されて、それを知らずに居りましたか。それの分らぬ樣な日の

出神なら我々は信頼する丈けの價値がありませぬ」

一同は「ヒヤ〳〵」と叫ぶ。中には「加米彦さん、確り頼みます」と彌次る者もあつた。

高姫「誰が何と言つても日の出神に間違ひはない。そんな小さい事に齷齪して居る樣な日の出神なれば、如何して此三千世界の御用が勤まりますか。物が分らぬにも程がある。假令此高姫一人になつたとて此事仕遂げねば措きませぬぞ」

加米彦「高姫さん、一人になつてもこと今言はれましたな。此通り澤山の方々が見えて居つても、只一人も貴女の說に贊成する者が無いのを見れば、既に已に一人になつて居るのではありませぬか」

塲の四隅より「妙々」「贊成々々」「しつかり頼む」「孤城落日」等の彌次り聲が聞えて來た。

高姫「盲目千人、目明一人の世の中とはよくも言つた者だ。神樣の御心中をお察し申すあゝあ、斯んな分らぬ身魂の曇つた人民計りを、根の國、底の國の苦しみから助けてやらうと思召す大神樣や、日の出神樣の廣大無邊のお心がおいとしい」

と涙を拭ふ。

加米彦「高姫さん、貴女の誠心は我々も認めて居りますが、然し乍ら根本的に大誤解があるのを我々は遺憾に存じます。貴女の肉体は變性男子の系統だから曲津神が抱込んで、國治立大神のおでましを妨害し、再び惡魔の世界にしやうとして居るのですから、ちつとは省みなさつたが宜しからう、我々の樣な肉体に憑つた處で惡魔の目的は達しない。斷つても斷れぬ系統の肉体を應用して日の出神だと誤魔化すので

すから御用心なさらぬと、遂には貴女の身の破滅は言ふに及ばず、大神樣の御經綸を妨害し天下に大害毒を流す樣になりますから、此處は一つ冷靜にお考へを願ひたい。寄ると觸ると幹部を始め數多の信者は、此事計りに頭を惱めて居りますが、然し貴女が變性男子の系統でもあり、斷つても斷れぬお方ぢやと言ふので皆遠慮して居るのです。此加米彦なればこそ、職を賭して斯かる苦言を申し上げるのです。決して貴女を排斥しようとか、除け者にしようとの惡い心は少しもありませぬ。第一貴女のお身の上を案じ、大神樣の御經綸を完全に成就して頂き、世界の人民もミロクの神政を謳歌し、一時も早く松の世をつくり上げ度いとの熱心から御忠告を申し上げるのです。何卒よくお考へを願ひます」

高姫「秋山彦の門番、加米彦、そりや何を言ふか。ヤツとの事で宣傳使の末席に加へられたと思つて、ようツベコベと其んな屁理窟が言へたものだ。系統を抱き込んで目的を立てると言ふ事は、それは言依別命の事だ。此高姫は正眞正銘の變性男子よりも早い神樣の御降臨、云はゞ變性男子よりも高姫の方が先輩と云つても異論はありますまい。打割つて言へば、變性男子よりも此日の出神の生宮が教祖とならねばならぬ者だ。變性男子の肉体は最早昇天されたのだから、後は高姫が教祖の御用をするのが神界の經綸上當然の歸結であります。然し乍ら一歩を讓つて變性女子の言依別を教主にしてやつて置いてあるのは、皆此高姫が默つて居るからだ。然し最早斯う成つては勘忍袋の緒がきれて來た。日の出神が加米彦の宣傳使を今日限り免職させ、杢助の總務役を解き、言依別命を放逐し、玉治別、國依別の沒曉漢も今日限り免職させるから、今後ノツ〳〵歸つて來ても皆さんは相手になつてはなりませぬぞ」

加米彦『アハ、、、、何程高姫さんが地團駄踏んで呶鳴らつしやつても、少しも我々に於ては痛痒を感じませぬ。お前さんに任命されたのではない。言依別神様に任ぜられたのだから、要らぬ御心配をして下さいますな』

高姫『お前さん等の知つた事ぢや無い。善一筋の誠正直を立て通す妾の仕込んだ魔我彦竹彦兩人こそ、本當に立派な宣傳使だ。是から誰か何と言つても魔我彦を總務にし竹彦を副總務に神が致すから左様心得なされ。嫌なお方は退いて下され。此錦の宮は高姫が誰が何と言つても總監致すのだから』

此時佐田彦、波留彦の兩人は壇上に駈上り、

佐田彦『我々は言依別命様より或特別の使命を帶び、御神實の御用を勤めた者であります。何と言つても高姫さんは其隱し場所が分らなくては駄目ですよ。大勢の者が如何しても貴女に畏服するのは、貴女が天眼力で玉の所在を言ひ當なくては日の出神も通りませぬ』

高姫は目を瞋らせ、

高姫『エ、、又しても門掃の成上りがツベコベと何を言ふのだ。玉の所在が分らぬ様な事で斯んな啖呵がきれますか。屹度時節が來たなれば現して見せて上げよう』

佐田彦『日の出神も時節には叶ひませぬかな』

波留彦『我々の心の裡にチヤント仕舞ひ込んであるのだが、常平生から人の心が見え透くと仰有る日の出神さんに、此胸の中を一寸透視して貰ひませうか』

と襟を兩方に開け、胸板を出して稍反身になり、握り拳を固めてウン〳〵と歐つて見せた。

高姫『ツベコベと神に向つて理窟を言ふ間は駄目だ。誰が何と言つても魔我彦、竹彦位立派な者はありませぬワイ。妄の言ふことが氣に喰はぬ人はトットと尻からげて歸つて下さい。お筆先に此大本は大勢は要らぬ。誠の者が三人さへあれば立派に御用が勤めあがると、變性男子のお筆にチヤンと出て居る。今が立替立直しの時期ぢやサア／＼早う各自に覺悟を成さいませ。此處は大勢は要りませぬ。大勢あるとゴテついて、肝腎の御用の邪魔になる。日の出神の生宮が天晴れ神政成就さして見せるから、其時には又集まつて御座れ。神は我子、他人の子の隔ては致さぬから、其時になつたら、「高姫樣始め魔我彦、竹彦の宣傳使、エライ取違ひを致して居りましたから、何卒御勘辨下さりませ」と逆トンボリになつてお詫に來なされ。氣好う赦して上げるから、今は御神業の邪魔になるからトットと歸つて下され。歸るのが嫌なら高姫の言ふ事を聞い一、改心をなさるが宜からう」

斯かる所へ杢助は魔我彦、竹彦兩人を從へ、ノソリ／＼と人を分けてやつて來た。群集は三人の姿を見て思はず雨霰と拍手した。杢助一行は一同に目禮し乍ら講座に上り、

杢助『ア、是は／＼高姫樣、御苦勞で御座いました。嘸お疲れでせう。貴女の御信任厚き魔我彦、竹彦の立派な宣傳使が見えました。是から貴女に代つて演說なさるさうです。私も大變に兩人さんのお說には感服致しました』

高姫は百万の援軍を得たる如き得意面を曝し、肩を聳やかし稍仰向き乍ら、

高姫『杢助殿、ア、それは御苦勞であつた。よう其處迄改心が出來て結構だ。是から何事も高姫の申す事を聞きなさるか、イヤ改心をなさるか』

杢助『改心の徹底迄いつたものは、最早改心する餘地がありませぬ。貴女の樣に改心か

ら後戻りをして慢心が出來ると、又改心する機會がありまするが、我々の如き者は融通の利かぬ困つた者です。貴女の樣に慢心しては改心し、改心しては慢心し、慢心改心、改心慢心と自由自在の藝當は、到底我々の樣な朴訥な人間では不可能事です、アッハ、、、、』

と豪傑笑ひをする。群集は手を拍つて笑ふ。

高姫『ア、魔我彦、竹彦、好い處へ歸つて御座つた。皆さんに合點の往く樣に此處で改心の話を聞かして下さい。さうすれば此高姫の日頃教育した力も現はるゝなり、お前さんの善一筋の一分一厘歪はぬ日本魂の生粹が證明されるのだから、サア早うチャッと皆さんに大々的訓戒を與へて下さい。これ〳〵加米彦、佐田彦、波留彦、餘り澤山に講座に居ると窮屈でいかぬ。暫らく下へおりて、魔我彦や、竹彦の大宣傳使の御說教を聞くのだよ。さうすれば、チットはお前さんの我も折れて宜からう』

と得意滿面に溢れ肩を搖りイソ〳〵といきつて居る。魔我彦は大勢に向ひ、

魔我彦『皆さん、私は高姫樣の神樣に御熱心なる御態度に心の底から感銘致しまして如何かして高姫樣の思惑を立てさし度いと思ひ、御心中を忖度致しまして紀伊の國に罷り出で、實の處は若彦を巧く誑かし聖地へ連れ歸り、杢助さん、言依別の教主を或難題を塗りつけ放逐しやうと企みつゝ、大臺ケ原の峰續き青山峠までスタ〳〵やつて往つた所、玉治別、國依別の兩宣傳使が谷の風景を眺めて、休息して居られました。そこで高姫樣の一番お邪魔になるのは言依別命、それについで命の信任厚き玉治別、國依別の兩人を、何とかして葬り去らうと思ひ進んで行つた所、折

よくも日の暮前兩人に出會し、二人の隙を覗ひ千仞の谷間へ突落し、高姫樣の邪魔ものを除かんものと考へて居りました。萬々一都合よく行けば、あとに殘つた言依別命位は最早物の數でもないと、忽ち惡心を起し、思ひきつて谷底へ突き込みました。兩人は五躰が滅茶々々となつて斃死つただらうと思つて居ましたが、あに計らんや妹圖らんや若彦の館に於て杢助樣始め玉、國の兩宣傳使に出會した時のその苦しさ怖さ、屹度復讐を討れるに相違ないと思つて心配を致し、生きた心地も無くガタ〳〵慄へ乍ら、矢庭に庭前の松の樹に駈上り、神憑りの言を信じ雲に乘つて逃げ出さうと思ひ、過つて二人共樹上より大地に向つて眞逆樣に墜落し、人事不省に陷つて居る所を、玉、國の兩宣傳使の手厚き御保護を受け、さうして鵜の毛の露ほども怨み給はず、却て神樣から結構な教訓を受けたと喜んで下さつた時の我々の心、到底高姫さんの教へられる事とは天地雲泥の違ひで御座いました。そこで私は何故此樣な善のお方を惡く思つたか知らぬと、懺悔の念に堪へず考へ込んで居りましたが、矢張言依別の教主の教理を聞いて御座るお蔭で、斯んな立派な人格になられたのであらうと深く感じました。又私があの樣な惡心を起したのも、矢張高姫樣の感化力がさせた事だとホト〳〵恐ろしくなりました。如何しても人間は師匠を選ばねばなりませぬ。水は方圓の器に隨うとか申しまして、教はる師匠、交はる友によつて善にもなり、惡にもなるものと堅く信じます。私は皆さんに今日迄の取違を此處にお詫致します」

高姫「コレ〳〵魔我彦、誰がそんな亂暴な事をせいと言ひましたか、それは大方言依別の靈が憑つたのだらう」

竹彦『イヽエ、言依別さんの身魂は餘り尊く清らかで、我々の樣な小さい曇つた鏡には おうつりに成りませぬ。全く高姫さんや、黒姫さんの生靈が憑りましてな』

聽衆は手を拍つてドヨメキ渡る。杢助は又もや口を開き、

杢助『皆さん、私は言依別の教主より内命を奉じ、十津川の谷間へ急行せよとの仰せ により行つて見れば、谷川に似合はぬ大瀧の下に立派な青い淵がありました。そこ で水行して居ると上から二人の男が突然降り來り、ザンブとばかり淵へ落ち込んだ 日の暮紛れに何人か分らねども見逃す譯にも行かぬ、直に淵へとび込んで救ひ上げ 色々と介抱した所、二人の男は漸く息を吹き返しました。よく〳〵見れば、玉治別 國依別の宣傳使で御座いました。それより兩人に向ひ如何して斯んな所へ落ち込ん だのですかと尋ねて見ましたが、御兩人は他人に瑕瑾をつけまいと言ふ誠心から、 現在此厳我彦、竹彦につき落された事を一言も發せず隱して居られました。さうし て二人に對して毛頭怨みを抱いて居られないのには私も感服致しました。是と言 ふのも全く瑞の御靈の大精神を体得して居られるからだと、流石の杢助も感涙に咽 び、それより三人は道を急いで若彦の館に行つて見れば、魔我彦、竹彦の兩人が何 事か善からぬ嘘言を構へ若彦を唆かし大陰謀を企まんとして居る所でありました。 然し乍ら流石の惡人も誠の心に感じ斯くの如く改心を致して、自分の罪狀を逐一皆 さんの前に曝け出し眞心を示して居られます。之でも言依別樣の教が惡と言はれま せうか。高姫さんの教は果して完全なもので御座いませうか』

と釘をさゝれて高姫はグッとつまり、壇上を蹴散らす如き勢で肩を斜に首を左右に 振り乍ら、己が館へ足早に歸り行く。

斯かる所へ言依別の教主は莞爾として現はれ一場の演説を試みた。玉治別、國依別、若彦の三人は此場に悠然として現はれ來り、一同に會釋し、神殿に向ひ天津祝詞を奏上し終つて一同解散した。今後の高姫は如何なる行動を執るであらうか。

（大正一一・六・一〇　舊五・一五　北村隆光錄）

いかめしきよそほひばかり魂は
獸に近き今の世の中

第二篇　恩愛の涙

第五章　親子奇遇（七一七）

三五教の宣傳使
言依別の御言もて
其心力を試さんと
姿をやつして雪の空
武志の宮の社務所に
松鷹彦に巡り會ひ
天の眞浦を深雪降る
東を指して進み行く

秋彦駒彦兩人は
天の眞浦の宣傳使
人の尾峠の山麓に
茲に三人は宇都山の
暫し休らひ神司
秋彦駒彦兩人は
岸の上より突落し
神の惠に近江路や

比叡山嵐を浴び乍ら　大津伏見を乗り越えて
小舟を用意ひ淀の川　川幅さへも牧方の
浦に漸々舟止め　浪速の里を右に見て
堺岸和田佐野深日　紀の川渡り和歌山を
何時しか過ぎて日高川　やう〳〵川邊に着きにけり。

日は漸くに暮れて來た。旬日の雨に川は濁水漲り、渡舟を出す由もない。二人は己むを得ず後へ引返し、日高山の山奥に瀧ありと聞き、暫し川水の減く迄荒行をなさんと、月の光を力に、山奥深く進み入る。瀧の邊には小さき祠があつて、龍神が祀られてある此社の周邊には不思議にも立派な柿の實が、枝もたわゝにぶら下つて居る。人も取らねば鳥も取らない。龍神の最も寵愛の柿と稱へられて居る。二人は夜中に人の足跡に研ぎすまされた路を辿り、漸く瀧の傍に着いた。手早く衣類を脱ぎ棄て、瀧水に體を清め祝詞を奏上し終つて、社の前に端坐し、鎭魂の姿勢を執つた。たわむ許りの柿の枝は折柄の强風に煽られて二人の體を撫でて居る。二人は美味さうな匂ひに、鎭魂を終り、てんでにむしつて飽まで食つた。忽ち社殿は鳴動し始めた。其聲は時々刻々に强大となり地響きがし出した。

秋彦『ヤアどうやら地震らしいぞ』

駒彦『ナアニ、地震ではない。餘り烈しき鳴動で地響きがして居るのだ。それに就ても我々が此柿を取つて食ふが早いか、此社殿が鳴動し始めたぢやないか。神樣は惜んで御座るのではあるまいかなア』

秋彦『ナニこれ丈澤山の柿、五つや十食つた所で、我々でさへも惜まないのだから、況

して神樣は人間が喜んで食ふのを、御立腹なさる道理がない。人間が食ふ爲に出來て居るのだ。そんな事は有るまい』

社殿はます〳〵鳴動烈しくなり、何とも知れぬ厭らしき聲で呶鳴りつけられる樣な氣がして、知らず〳〵に二人は怖氣づき、『惟神、靈幸倍坐世』と稱へ乍ら、元來し路を轉けつ轢びつ逃げて行く。夜は漸く明け放れた。谷川の清き水に衣を洗ふ白髮異樣の婆がある。

秋彦『駒彦さん、向ふを見よ。出よつたぜ』

駒彦『ヤア本當に、怪体な奴が居るぢやないか。何か洗濯をして居るやうだ。此山奥に人家も無いのに、あんな年の老つた老婆が洗濯して居るとは、チッと合點が行かぬ此奴ア何者かの化物かも知れないぞ。用心せなくてはなろまい』

秋彦『谷と谷とに狹つた一筋路の所に居るのだから、どうしても通らぬ譯にも行かず、思ひ切つて行つて見ようかなア』

駒彦『何れ行かねばならぬ道程だが、マア一寸考へて行く事にせう。强く行くか、弱く行くか、それから一つ定めて行かうぢやないか』

秋彦『兎も角臨機應變、其時の都合にしよう』

と薄氣味惡く、歩みもはか〳〵しからず、厭相に一歩々々進んで行く。見れば婆の頭の白髮から鼈甲の樣な角が前の方へニューッと曲つて二本、高低なしに行儀よく八の字を逆樣にした樣に生えて居る。

秋彦『オイ駒彦、此奴ア弱く行けば附け込まれる。强く行けば怒つてかぶりつくかも知れない。兎も角滑稽で婆アの腮を解いて通る事にしようかい。それに就ては秋彦、駒

彦では思白くない。元の馬公、鹿公に、名だけ還元して掛合つて見よう」

駒彦「それが宜からう」

と小聲に言ひ乍ら、婆の間近に近寄つて來た。婆は聾と見えて、二人の足音に氣が付かぬもの、如く、一生懸命に血の附いた衣を洗うて居る。

秋彦「モシ〳〵お婆アさん……コレお婆アさん」

と後の一聲に力をこめて高く呶鳴つた。婆アさんは一生懸命に見向きもせず、洗うて居る。

秋彦「ハハア此奴ア聾だ。併し隨分厭らしい婆だ。彼處を渡らねば向うへ行く事は出來ず困つた事だなア。暫く後へ引返し、婆アが洗濯を濟まして歸るまで待つことにせうかい」

駒彦「イヤもう一歩も後へ歸る事は出來ない。あれ丈鳴動しられ、厭らしい聲で呶鳴られては、堪つたものぢやないからな」

秋彦「それだと云うて進む譯にも行かず、進退谷まるぢやないか」

駒彦「そこが宣傳使だ。神樣のお力で突破するのだ。鬼婆に喰はれた所で構はぬぢやないか」

秋彦「こんな奴に食はれて堪るものか。お道の爲に生命を棄てるのは苦しうないが、鬼婆の餌食になつちや宣傳使も駄目だ。聾を幸ひ、ソッと背後から往つて、婆を突つこかし、其間に駈歩で進まうぢやないか」

駒彦「オウさうだ。たかが知れた婆アさんの一人、此方は二人の荒男だ。併し乍ら騙討は面白くない。婆アさんに斷つて通らして貰はう。萬一通さぬと言ひよつたら、

其時こそ我々は死物狂ひだ」

と言ひ乍ら、婆アさんの狭い谷川に寒がつて居る側近く寄り、俯むいて居る腰を恐さうに押し乍ら、

駒彦『コレ〳〵お婆アさん、此處を通して下さい』

と搖つて見た。婆アさんは驚いて二人の顏を打ちまもり、

婆『ヤアお前はそんな風をして、山賊を働いて居るのか。此婆はお前の見かけの通り何一つ持つて居ないぞ』

駒彦『オイ婆アさん、お前は耳が聞えぬのか』

と耳の邊へ口を寄せ、力一杯呶鳴りつけた。婆アさんはビックリして、

婆『エヽやかましいがな。聾か何その樣に、そんな大きな聲で耳のはたで云ふものぢやない。鼓膜が破れて了うぢやないか』

駒彦『鬼婆アさん、お前耳が聞えるのか』

婆『聞えるとも、耳の無いものならイザ知らず、此通り二つの耳が有るぢやないか。聞えぬ耳なら、誰がアタ邪魔になる、顏の兩側にひつゝけて置くものかい。譯の分らぬ泥坊ぢやなア』

秋彦『是れは怪しからぬ。我々を泥坊とは何の事だ』

婆『それでも蓑笠を着たり金剛杖を突いとる奴は皆泥坊だよ。此間もバラモン教の宣傳使ぢやとか云つて、老爺と婆アと娘と三人連れの所へ、二人の奴が泊り込み、夜の夜中を見濟まして、此婆アや爺ぢんを柱にひつ括り、一人の娘を調裁坊に致し、年寄りの蓄めた金をスツクリふんだくり、終局にや娘を嬲殺しにして歸りやがつた

大方お前も其奴等の同類だらう。あんまり胸糞が悪いので、お前達二人がコソ〳〵話をやつて居つたが聞かぬ振りをして居つたのだ。モウ斯うなる上は讎敵の片割れだ。皺腕の續く限り搭闘して喉笛の一つも喰ひ切らねば置かぬ。サアどうだ』

秋彦『これは〳〵怪しからぬ事を仰有る。併しお前さんは頭に角を生やして居るからは人を取り喰ふ日高山の鬼婆だらう』

婆『きまつた事だ。鬼婆だから角が生えとるのぢや。サア其處へ平太れ。此婆が荒料理をして娘の仇を討つてやらう』

駒彦『コラ婆、何を吐しやがるのだ。俺は三五教の馬公と云ふ宣傳使だぞ。泥坊なんて……馬鹿にするな。さうして貴樣の娘なればヤツパリ鬼娘だらう。日頃人を喰ふ酬いで我子を取られたのだらう。鬼子母神と云ふ奴は、千人の子が有る癖に、人の子を奪つて喰ひよつた奴だが、或時に神樣から、千人の中の一人の子を隠されて、朝から晩まで泣き通し、それから……わしは千人も子がある中にタツタ一人失つても是れ丈悲しいのだ、況して人間は三人や五人、多うて十人位の子を一人取られたら悲しからうと云つて、改心しよつて立派な佛になつたと云ふ事だが、貴樣も子を取られて悲しい事が分れば、是れから人間の子であらうが、親であらうが、決して取り喰うてはならぬぞ』

婆『ホ、、、、、わゝを鬼婆と云ふのか、そしてお前さんは三五教の宣傳使ぢやなア宣傳使なら、鬼婆か普通の婆アか分りさうなものぢやないか』

駒彦『それでも頭に角の生えてる奴は鬼ぢやないか。俺は斯う見えても、元は馬さんと云つて、紀の國の生れ、樣子あつて都へ出で、立派な宅に召使はれ、追々出世し、

今は押しも押されもせぬ宣傳使樣ぢや。どうして見損ひをするものかい。そんな有耶無耶の事を言つて、俺を誤魔化さうて思つても駄目だぞ』

婆『ナニッ、お前は紀の國の生れ……都へ奉公に行つて居つたと……それは妙な事を聞くものだ。さうしてお前の名は馬ぢやないか』

駒彦『さうぢや、馬と云つたのぢや。それが如何したと云ふのだい』

婆『一寸此方に心當りがあるから、婆の宅まで來て貰へまいかな』

秋彦『オイ〳〵駒彦、しつかりせよ。計略に懸るぞよ』

婆『疑ひなさるな。爺イと婆アと二人暮しだ。一人の兄は幼い時に天狗にさらはれて何處かへ連れて行かれたきり今に歸つて來ず、一人の妹娘は泥坊に二三日前生命を奪られ、爺婆二人が面白からぬ月日を送つて居るのだ。小さい宅だけれど、滅多に食はうとも、呑まうとも云はぬ。尋ねたい事が有るから來て下され』

駒彦は双手を組み首を傾け、婆アさんの顏を熟々と眺めて居る。

駒彦『お婆アさん、其角は何時から生えましたか』

婆『オホ、、、、あんまり泥坊が出て來よるので、用心の爲に鹿の角を頭にひつ付けて鬼に見せて居るのだ。それ此通り……』

秋彦『アハ、、、、ヤア是れで一寸は安心だ。さうするとヤッパリ鬼婆ではなかつたらしいな。コレ〳〵婆アさん、お前のお宅は何處だ』

婆『そこへニユッと突き出て居る大きな岩を、クルッと廻ると、炭燒小屋の樣な家がある。そこが妾の住家だ。此村は七八軒の所だが、近所へ行くと云つても一里位行

かなゝらぬのだから不便なものだ。サアどうぞ婆の宅まで來て下さい」

駒彦『何は兎もあれ、お婆アさん、從いて參りませう』

婆はニコ〳〵し乍ら先に立ち歸つて行く。駒彦は何か心に當るものゝ如く首を頻りに左右にかたげ乍ら從いて行く。あとより秋彦は不審相に二人の姿を看守りつゝ、二三間遲れて、厭相に進んで行く。山の鼻にヌッと突出た岩の麓を廻ると、七八間向うにかなり大きな草葺の家が建つて居る。婆アさんは駒彦に向ひ、

婆『あれが妾の家だ。どうぞ今晩はゆつくり泊つて往て下されや』

秋彦は『なんだ、合點がゆかぬ事だなア』と呟きつゝ、不安の念に驅られ、手を組んで細路に佇立して居る。婆アさんは半破れた戸をガラリと開き、

婆『サア〳〵お若い衆、這入つて下さい』

駒彦『ハイ有難う』

と後を振り返り見れば、四五間あとに秋彦は手を組み思案らしく佇んで居る。

駒彦『オイ秋彦、早う來ぬか。何して居るのだ』

秋彦『俺は外から警固して居るから、貴樣用心して中へ這入れ。釣天井でも有つてハサン〳〵とやられちや大變だから、よく氣を付けて這入れ。俺はサア事だと思つたら直に飛び込んで讎敵を討つてやるから……マア豫備として、俺は外に待つて居る』

駒彦『そんなら宜しう賴む』

と閾を跨ぎ屋内に姿を隱した。爺イさんは目も疎いと見え、ヨボ〳〵し乍ら奥の間から現はれ、

爺『アー婆か、よう歸つて呉れた。どうも寂しくて困つて居つた。あんまり歸りが遲

いので、又もや泥坊に出會したのではなからうかと、氣が氣でなかつた。併しお前の背後に誰か從いて來て居るぢやないか。ウツカリした者を引張つて來ると、又此間の樣な目に會はされるぞ。性懲りもない、道行く人間を掴まへて、善根だの、宿をしてあげようのと云ふものだから、あんな事が起るのだ。モウ今日は、お前が何と云つても私が承知をせぬ。……どこの方か知らぬがトットと歸つて下され』

婆　『爺さん、一寸此人は合點のいかぬ事が有るので連れて歸つたのぢや。妾だつてモウ懲りてるから、滅多な奴を連れて歸りはせぬ。此人は馬とか云ふ男ださうな、仲の名も馬だから、何とはなしに戀しくなつて連れて歸つたのぢや。ヒョッとしたら子供の時に天狗に浚はれた馬ぢやなからうかと、心の故か思はれてならないから……』

爺　『さう聞くと何だか戀しい樣な氣がする。コレ〳〵馬さんとやら、足をしもうて上つて下さい』

駒彦　『ハイ有難う厶います。私も一人者で御座います。何だか此お婆アさんが戀しくなつて參りました』

と云ひ〳〵足をしもうて座敷にあがる。秋彦はコハ〴〵乍ら門口までやつて來て、樣子を考へて居る。

爺　『お前さんは馬さんと云ふさうだが、一体何處の生れだ』

駒彦　『ハイ私は餘り小さい時で、しつかりは記憶しませぬが、何でも日高川の畔たつた樣に幽かに覺えて居ります。併し乍らそれも夢だか現だか分らないのです。天狗にさらはれて山背の國の紫野の大木の上に引掛けられて居つたのを、そこの會長が

認めて助けて下され、それから其處の家の子となつて育つて來た者で御座います」

爺　『わしは常補と云ふ者だ。さうして婆アはお久と云ふ者だが、兩親の名は覺えて居るかい』

駒彦　『何分子供の事で分りませぬが、御主人樣のお言葉には、私の守り袋に、常とか久とか云ふ印があり、私の名は馬楠と書いてあつたさうで、主人は馬公〳〵と仰有つたのだと聞いて居ります』

爺　『ナニ、常に久、馬楠と書いてあつたか。そんならお前は私の伜ぢや。ようマア無事で居つて下さつた』

と兩人は取付いて泣き倒れる。

駒彦　『あゝ何だかさう聞くと、御兩親の樣にも思ひますが、しかし私の体には一つの特徴があります。それは御存じですか』

爺　『特徴と云ふのは、お前は小さい時から睾丸が人よりは優れて大きかつた。睾丸へルニヤとか云ふ病氣ださうで、大變に我々兩親は心配をして居つたのだ。お前さん睾丸はどうだな』

駒彦　『ハイ仰せの如く人一倍大きいのです。松姫館で大金だと言はれて引張られた時には隨分困りました。そこまで話が合へば全くあなたは御兩親に間違ありますまい。あゝよう無事で居て下さつた』

と駒彦もホロリと涙を流す。お久は、

お久　『せめて二三日前にお前が歸つて呉れたなら、妹のお輕もあんな目に會うのではなかつたぢやらうに……あゝ殘念な事をした。お前の行方を探したさ、若いうちに

夫婦が交る〴〵紀の國一面を歩いて見たが、どうしても行方が知れず、斯う年が寄つては歩く事も出來ぬので、人さへ見れば我家に泊つて貰ひ、何かの手懸りもがなと、善根宿をして居つたのだ。さうした所がエライ泥坊を泊めて、妹の生命を取られて了うたのぢや。あゝ可哀相に……妹が生きて居つたら戀しい兄さんに會はれたと言うて、どれ程喜ぶ事であらう。アーア、ア」

と婆アさんは泣き沈む。常楠爺イさんも、駒彦も共に涙に暮れ、鼻を啜つて居る。秋彦はこれを聞くより走り入り、

秋彦『ヤア駒彦さん、お芽出度う。お前が何時も兩親に會ひたい〳〵と云つて居つたが思はぬ所で親子の對面が出來た。これも全く大神樣のお恵みだ。お前ばかりか、俺も嬉しい。アヽ神樣有難う御座います』

と涙聲になつて、兩手を合せ、ちぎれ〳〵に咽び乍ら、感謝の祝詞を奏上する。屋根には熊野烏の群七八羽、松魚木に止まつて聲を嗄らして悲しげに『カワイ〳〵』と啼き立てる。天井に鼠の鳴き聲『チウ〳〵〳〵孝行々々』と聞えて居る。

（大正一一・六・一〇　舊五・一五　松村眞澄錄）

瑞月

ぬえ鳥の啼きて淋しき暗の夜も
神は身に添ひ守り玉へり

第六章　神異（七一八）

胸の思ひも秋彦や　心も勇む駒彦は
親子不思議の對面に　互に心も解け合ひつ
一夜々々と日を送る。

こゝへ來てから三日目の朝、一人の男、門の戸をガラリと開け、ノソ〳〵と入り來り

男　『常楠の爺さん、お前さんの内に旅人が泊つては居りませぬかな』

常楠　『ア、誰かと思へば助さんか、何用あつて朝早うからお出でになつたのだ』

助　『別に用と云つてはないのだが、よくお前の宅に旅人が泊るから、事に依つたら御尋ねしたい事があり、御願もしたいと思つて尋ねに來たのだよ。二三日前から二人のお客さんが來て居る筈だが……』

常楠　『お前の云ふ通り宣傳使が二人泊つて御座るのぢやが、ゆんな用があるのだい』

助　『ア、一寸した事が……、一先づ内へ歸つて、着物でも着替へて、改めて來る事にせう。こんな風では失禮だからな』

と云ふより早く踵を返し立ち去らうとする。常楠は無理に呼び止め、

常楠　『ア、コレ〳〵、お前の内へ歸らうと云つても隨分遠い道程だ。そんなむつかしい方だないから、御尋ねする事があれば、其儘尋ねて歸つたがよからう』

助　『別に頼む事はないが、一つ訊問すべき譯があるのだ。此間の晩にこゝへ泊つて居る二人の男が、龍神の宮の柿を盗んで食つたと云ふ事だ。會長さんのお耳に神樣からチヤンと御知らせがあつて調査に來たのだから、爺イさん、其二人を取逃さぬ樣

にして置きなさい。萬々一取逃しでもしようものなら、二人の代りにお前達夫婦が生命を取られねばなろまい。つい其附近まで酋長さんが數多の手下を引きつれ召捕に見えて居るのだ。つまり俺の來たのは實の所を言へば、偵察に來たのだよ。モウつい此處へ見えるだらうから……俺は歸つて酋長に……不在ではなかつた……とか、不在だつたとか云ふ積りだから、そこはお前の心に何々したがよからう。あんまり可哀相だからなア。グヅ〳〵して居るとモウつい見えるかも知れぬ。……ア、此處は裏口があり、木の茂みもあり、風景の佳い所だなア」

と今の内に逃よと云はぬ許りの口吻を漏らし、スタ〳〵と歸つて行く。

常楠は驚いて奥に入り、

常楠「お久に馬、一寸こゝへ來て呉れ、大變な事が起つて來た。秋彦さんに馬は龍神の宮樣の柿をむしつて食やせぬかな」

駒彦「宮の前に神樣を拜んで居ると、美味さうな柿が風に搖られて、顏のふちへ觸つて來たものだから、二人が取つて食ひました。隨分味の佳い柿でしたよ。なア秋彦、美味かつたなア」

お久「それは又何とした無調法をして呉れたのだ。そんな事をしようものなら此村は荒れて〳〵難儀をせなくてはならぬ。それで酋長さんが嚴しく御禁制になつて居るのぢや、何時でもあの柿を取つた者があると直に、酋長の耳の側へ龍神さんが告げに行かつしやるので、皆荒れが恐さに柿をとつた人間を早速人身御供に上げる事になつて居るのだが……アーア折角親子對面して嬉しいと思へば、又憂目を見るのかお輕には四五日前に別れ、又兄の馬に死別れるとは、何とした因果な我々夫婦であ

らう」

と泣き倒れる。

常楠『此場に及んで、泣いても悔んでも、最早後へは戻らない。何事も前生の因縁ぢや と諦めて、我々老夫婦が身代りになつて行かう。サア早く、馬に秋彦の宣傳使様、あなたは未だ行先が長い、是れから世の中の爲に盡さねばならぬから、どうぞ裏口から一時も早く逃出して下され。二人を逃がした罪は老人夫婦が引受けるから……

……アーア折角久し振りで悴に會うたと思へば、モウ別れねばならぬか』

と流石氣丈な常楠も男泣きに泣き立てる。

駒彦『御兩親様、御心配には及びませぬ。柿の五つや十取つたと云つて、村中荒れると云ふ様な分らずやの神なれば、てつきり邪神でせう。善惡の立替をなさる……我々は神々を脊中に負うて歩いて居る宣傳使だから、一つ其龍神を往生さして、此村の害を除く事にしませう。決して〳〵御心配下さいますな』

秋彦『我々はよい研究材料を得たのだ。ヤア面白うなつて來た。日高川が川止めになつたのも全く神様の御攝理であつたらしい。其お蔭で龍神を言向け和し、此附近の土地を安樂にしてやる様にするのは、我々宣傳使の好んで爲さねばならぬ神業だ。サア駒彦さん、行きませうか』

常楠『コレ〳〵兩人、お前達は年が若いから、そんな無茶な事を言ふが、昔から八岐の大蛇の一の眷屬さんぢやと云うて、大變な強い龍神さんが、あの瀧には鎭まつて御座るのだから、必ず〳〵そんな處へ行つてはなりませぬ。サア早く此裏口から逃て歸つて下され。あとは老人夫婦が身代りになるから……アーア是れが我子の見納

めか」

と又泣き沈む。お久も目を腫らし涙に暮れて顔さへえあげず、壁に喰ひ付いて、肩で息をして居る。

秋彦「我々二人が老人夫婦を見棄て立去る譯にはどうしてもゆかない。どうだ一層の事一人づつ背に負ぶつて、此山傳ひに安全地帶まで逃る事にしようか。なア駒彦、それより上分別はあるまい」

駒彦「我々は敵を見て退却するのは、何ともなしに心が濟まぬ。斯う云ふ時にこそ言靈の威力を以て如何なる强敵も言向け和すのが我々の職責ではないか」

秋彦「あゝそれもさうだ。そんなら捕手の來るまで此處に待つことにしよう」

斯く話す折しも門の外假に騷がしく、數多の人の足音刻々に近寄り來る。酋長の木山彦は十數人の從者を伴ひ物をも言はず表戸を引開け、ドヤ〳〵と入來り、

木山彦「ヤア常楠夫婦、汝が宅には龍神の宮の柿を盜み食つたる二人の宣傳使が匿まひありと聞く。サア速に兩人を此場に引摺り出し、手渡しせよ」

と嚴かに言ひ渡し、家の周圍に手下を間配つて逃がすまじと嚴重に構へて居る。常楠夫婦は答ふる言葉もなく「ハイ」と言つた限り、俯むいて涙の目をしばたゝいて居る。奥の一間より秋彦、駒彦の兩人は躍り出で、

秋彦「ヤア木山彦の酋長とやら、お役目御苦勞で御座る。如何にも我々は龍神の宮の柿を腹一杯取つて喰つた者で御座る、如何すると仰有るのですか」

木山彦「昔から龍神の宮の柿を取喰ふ者ある時は、龍神の祟りに依つて、日高山一帶の地方は大洪水、大風、大地震の天災地變が起つて來るのだ。一昨夜も我耳許に龍神

現はれ、駒彦、秋彦と云ふ二人の男、柿を取喰ひ、今常楠の家に逗留し居ると御知らせになつた。可哀相だが汝等二人を、今晩は人身御供にあげ、お詫を致さねばならぬ。これも此村の昔からの掟だから、觀念して我々の申す通り、神妙に人身御供にあがるがよからう」

と聲も曇らせ乍ら、稍俯むき同情の思ひに暮れて居る。駒彦、秋彦は木山彦の心を察し

駒彦「ハイ有難う。どうぞ私を人身御供にやつて下さい。今度は惡業をなす龍神をスツカリ改心させ、柿の木を根元より掘起し、龍神の宮を叩き壞し、向後の害を除きませう。サア〳〵どうぞ早く我々兩人を引張つて往つて下さい」

木山彦「早速の御承知、我々滿足に思ふ。が併し宮を潰し木を伐るなどとの暴言は止めて貰はねばならぬ」

常楠涙の顏を上げ、

常楠「モシ曾長樣、實の所此男は三才の時に天狗に攫はれて、行方の分らなかつた馬楠で御座います。二三日以前にフトした事から、親子巡り會ひ、喜ぶ間もなく斯んな悲しい事になりました。妹のお輕は賊に殺され、二人の子供は老夫婦を後に殘して、冥土の旅立を致さねばならぬ破目になつたのも、私の深き前生の罪がめぐつて來たので御座いませう。御推量下さいませ」

と涙を拭ひ俯むく。お久は身を慄はせ泣く計りであつた。木山彦も悲歎の涙に暮れ乍ら

木山彦「ア、彼の馬楠と云ふ子は此人だつたか、實にお歎きの程お察し申します。併し乍らお前の子も天狗に浚はれたが、假令二日でも、親子の對面が出來て別れるのだからまだしもだ。我々は恰度お前の倅と同じ樣な年輩で鹿と云ふ子があつた。それ

が何者に浚はれたか今に行方は知れず、比叡山を立出てそれより大和、河内、紀の國と所在を探し、漸う〳〵此處で觀念の臍を固め、最早死んだものと諦め、村人に選まれて會長になつたのだが、お前が忽に面會した喜びを思ふに付けて、私も何だか失うた子供の事を思ひ出し悲しうなつて來た。ア、仕方がない。何事も運命だ。サア二人の方、氣の毒乍らチヤンと用意が出來て有る。此唐櫃に這入つて下さい』

秋彦は木山彦の言葉、鋭く耳に入り腕を組み呆然として居る。常楠夫婦は聲を限りに泣き叫ぶ。木山彦は涙を隠し、聲を荒らげ、

木山彦『時遲れては一大事サア早く〳〵』

と迫き立てる。駒彦、秋彦は直に唐櫃の中に飛び込まうとするを、木山彦は押止め、

木山彦『ア、お二人さん、一寸待つて下さい。こゝに白裝束が持つて來てある。お前さんの着物をスツクリ脱ぎ捨て、此れと着換て往て貰ひたい』

二人は『あゝ久し振りで新しき御仕着せを頂戴致します。……サア是れから千騎一騎の活動だ』

と心に喜び乍ら唐櫃の中に這入つて了つた。木山彦は『助公々々〳〵』と呼び立てる。言下に助公始め十數人の男はバラ〳〵と集まり來り、唐櫃の戸を固く締め、七五三縄以て縛り付け、大勢に擔がせ、此家を立出でんとする時、老夫婦は慌て門口へ送り出で、其儘そこに昏倒して了つた。木山彦は二三の男を後に殘し、老夫婦の看護をさせ、漸く息を吹き返さしめた。會長は老人夫婦を勞り慰め、悠々として家路に歸つた。

一方二臺の唐櫃は龍神の宮指して、人夫の唄の聲と共に遠ざかり行く。老人夫婦は互にしがみつき悲歎の涙遣る瀬なく、身を悶え居る時しも、押入れの中よりムク〳〵と現

はれ出たる駒彦、秋彦の二人、老夫婦の背を撫で、

駒彦『モシ〳〵馬で御座います。……秋彦で御座います。御安心下さい。コレ此通り無事に居ります』

と聞いて夫婦は二度ビックリ、夢か現か幻かと二人の顔を看まもり、暫しは言葉もえ出さず呆れて居る。稍あつて常楠は、

常楠『ハテ不思議な事もあるものだなア。如何して此處へお前達は歸つて來たのか。又もや追手が迫つて來はせぬか。サア早く何とかせねばなるまい』

と嬉しさ恐さに身をもがく。

駒彦『御兩親さま、御案じ下さいますな。只今大神樣へお願致しました所、高倉、旭の明神現はれ、身代りになつて行つて呉れられました。モウ大丈夫です。併し乍らこ

こに居つては一大事、サア今の内に我々四人、手に手を取りて日高川を渡り、熊野方面指して參りませう。必ず御心配は要りませぬ。我々は神樣と二人連れ、滅多な事はないから、一時も早く此處を立去る事に致しませう』

老夫婦は雀躍りし、一も二もなく二人の言葉に賛意を表し匆々此家に火をかけ、急いで日高川の岸邊を指して進み行く。

★　★　★　★　★　★

木山彦は二三の從者と共に我舘に立歸り、ものをも言はず奥の一間に入りて、双手を組み溜息をつき、思案に暮れて居る。此場に茶を汲んで現はれた妻の木山姫は、夫の普通ならぬ顔に不審を起し、恐る〳〵兩手を突き、

木山姫『今日に限つて心配さうなあなたの御顔、何か又大事が突發致しましたか』

と尋ねる。木山彦は妻の言葉の耳に入らざるが如く、默然として俯むき、兩眼よりは紅涙滿々として滴るのであつた。木山姫は合點行かず、側近く寄り添ひ、

木山姫『モシ我夫樣、何か御心配な事が出來ましたか』

と云ふ聲に始めて氣がつき、

木山彦『アヽ木山姫か』

木山姫『今日に限つてハッキリせぬあなたの御顏、どうぞ包み隱さず仰有つて下さりませ』

木山彦『アーア人間位果敢ないものは無い。私も三人の子供があつたが二人迄、村の者が龍神の宮の柿を取り、何處かへ遁走したので、其身代りに二人の娘は奪られ、一人の忰は何者に浚はれたか、幼少の時より行方知れず、斯うして二人が日高の庄の會長と仰がれ、老の餘生を送つては居るものゝ、思へば〳〵寂しい事だ』

と又俯向く。

木山姫『今日に限つた事では御座いませぬ。どうぞ過去つた事は思ひ出さずに、ハンナリとして暮して下さいませ。妾も女の身乍ら既に諦めて居ります』

木山彦『若しも紛失いたした忰の鹿公が此世に居つたら、お前は如何思ふか』

木山姫『お尋ねまでもなく、そんな嬉しい事は御座いませぬ。して又忰の行方が貴方にお分りになつたのですか』

木山彦『イヤ分つたでもなし、分らぬでもなし。……アーア實に殘念な事ぢや。會はぬがマシであつたわい』

木山姫『エヽ、何と仰せられます。會はぬがマシ……とは心得ぬお言葉。あなたは忰に

お會ひになつたのでせう。なぜ如何とかして連れて歸つては下されませぬ」

木山彦『連れて歸りたいは山々なれど、儘にならぬは浮世の慣ひだ。あの常楠の老夫婦も一人の娘を賊に殺され、永らく分らなかつた悴に遇うたと思へば、龍神の宮の人身御供にあげられ、言ふに謂はれぬ悲歎の涙に暮れて居た。アヽ可哀相だ。他人の事かと思へば我身の事だ。日頃心にかけて慕うて居つた悴の鹿公も……アヽモウ言ふまい〳〵』

と又もや傍向き吐息をつく。

木山姫『それは〳〵常楠の老夫婦も可愛相な事をしましたなア。併し悴の鹿にお會ひになつた樣な貴方のお言葉、それは一体如何なつたので御座います』

木山彦『モウ仕方がない。驚いて呉れな實は鹿公に會うて來た。名乘もならず、暗々と常楠の悴と共に人身御供にやつて了うた』

と耐ばり切つたる悲しさの堤も切れて、大聲に男泣きに泣き立てた。木山姫もハッと驚き共に涙に正体なく身を搖つて泣き倒れる。斯る所へ息急き切つて走つて來た小頭の助公は、

助公『申上げます。唯今龍神の宮へ二人の人身御供を持つて參りますと、神殿假に鳴動致し、中より白髮異樣の恐ろしき神が現はれ、唐櫃の戸を叩き破りました途端に、二人の宣傳使は躍り出で、白髮異樣の神を相手に組んづ崩れつ大格闘をやつて居りましたが、遂には宣傳使の力が勝れて居つたと見え、神さんは二つに引き裂かれて谷川へドット許りに投げ込まれ、川水は忽ち血の川となつて了ひました。我々共は大地に平太張り恐々此活劇を見て居りました所、二人の宣傳使は我々に向ひ……最

早龍神の宮の惡神は退治致したれば、今後は決して人身御供などを請求する氣遣ひはない。又今後は柿の實は汝等勝手に取つて食つて差支ない……と仰せられ、且私を特に近くお召しなされ……一時も早く此事を木山彦の酋長に傳達せよ……との嚴命で御座りました。ハッと驚き承知の旨を答へまするとと、二人の宣傳使は谷川傳ひに猿の如く何れへか姿を隱されました、最早今後は人身御供の憂へも御座りませぬから、御安心下さりませ」

と詳細に物語るを聞いた木山彦は立ち上り、

木山彦「ナニ龍神の宮の神樣を退治致したと……さうして其宣傳使の行方は分らぬか」

助公「ハイ餘り御足が早いので、追つ付いておたづね申す事も出來ずどこへお出になつたか皆目見當が付きませぬ。己むを得ず歸路に就けば常楠の家はドン〳〵と燃えて居ります。あゝ可愛相に老人夫婦は助けてやりたいと思ひ、探して見ても影も形もなく、大方自ら火を放ちて、夫婦が燒け死にでもしたので御座いませう。實に可愛相な事を致しました」

木山彦「それは御苦勞であつた。さぞ村人も喜ぶ事であらう。併し乍ら二人の宣傳使は何か落してはなかつたか」

と問はれて助公は、

助公「ハイ斯樣な物が落ちて居りました」

と守袋を懷から取出し手に渡せば、木山彦は、

木山彦「コリヤ木山姫、此守袋はお前覺えがないか」

と木山姫の前に突出せば、木山姫は、

木山姫『一寸見せて下さいませ』

と手に取り上げ、裏表を打かへし眺めて、

木山姫『あゝ確かに覺えが御座います。餘り古びて居りますので、ハッキリは分りませぬが守袋の底に○に十の字を印して置きましたが、未だにウッスリと殘つて居ります。これは全く悴の守袋に間違は御座いませぬ』

木山彦『それならば確かに悴に間違ない。兎の樣な尖つた耳で時々耳を動かせる所、鼻の先の尖つた所はお前に活寫、アゝ偉い者だなア。よう悴助かつて呉れた。常補の悴ちそれでは無事だつたか。あゝ有難い、全く熊野の神樣の御守護だ。サア女房、我々も此館を暫く明けて熊野へ夫婦連れ、御禮參りをしようではないか。又神樣の御引合せで悴に遇へるかも知れぬ、善は急げだ、早く用意をせよ』

木山姫『先づ〳〵ジックリと氣を落ち着けて下さりませ。急いては事を仕損ずると云ふ諺もありますから……』

木山彦は周章て、

木山彦『お前厭なら來なくてもよい、サア助公、隨伴の用意だ』

助公『ハイ畏まりました、直樣用意に取掛りませう』

木山姫『左樣なれば妾も一緒にお伴さして下さいませ。併し留守は如何したら宜しいか』

木山彦『留守も何も要つたものか。家財よりも何よりも、大切な寶は我子よりないのだ子に會へさへすれば、財産も何も要るものか。如何なろと構はぬ。サア早く往かう』

助公は家の戸締り萬端に氣を附け、夫婦の後に從ひ、熊野を指して出て行く。

（大正一一・六・一一　舊五・一六　松村眞澄錄）

第七章　知らぬが佛（七一九）

秋彦、駒彦の宣傳使は、常楠　お久の老夫婦と共に　木山の里を立出で漸う栗栖川の畔、栗栖の森に着いた。老人の事とて疲勞を感じ、此處に駒彦の父常楠は、俄に胸腹部の激痛を感じ、發熱甚しく、身動きもならぬやうになつて了つた。お久を始め秋彦、駒彦の兩人は、如何にもして常楠の病氣を恢復せしめんと、栗栖の宮の半破れたる社務所に立寄り、いろ〳〵と介抱に手を盡したが、病は追々重るばかりで、命旦夕に迫つて來た。

二人の宣傳使は栗栖川の上流に妙藥ありと聞き、手配して山深く藥草を求むべく進み入つた。後にお久は夫の看病に餘念なく、心力を盡して老の身の勞苦も打忘れ、看護に

努めた。人里離れし淋しき此栗栖の宮の森は人聲もなく、時々鳥の聲、百舌鳥の囁きが聞ゆるばかり、風は時を仕切つて吹いて來る。さすが暖國の冬も、今日に限つて殊更嚴寒を感じ、身に寒疣を現はすばかりであつた。

夜は深々と更け渡り、月は皎々と中天に輝き、憐れな老夫婦の境遇を憐れ氣に見下ろし給ひつゝあるものゝ如く、時々月の面を掠めて淡い雲が來往してゐる。其度毎にパッと明くなつたり、又パッと薄暗くなり、空には薄茶色の雲、白雲に混つて脚速く右往左往に彷徨して居る。

此時覆面した二人の大男、何事かヒソ〳〵と囁き乍ら、此森に向つて進み來り、社務所の中に老夫婦のあるをも知らず、緣側に腰打かけ、ヒソ〳〵話に耽つて居たが、遂には輿に乘つて聲高に囀り始めた。

甲『オイ虻公、此頃は泥坊商賣も薩張り冬枯れで、懷も寒いことだないか。なんぞ好い鳥がやつて來さうなものだな。木山の里で爺と婆アの家に泊り込み、奪つて來た金子は大方使ひ果し、最早二進も三進も行かなくなつて了つたぢやないか。此處で一つ大きな仕事をせぬことには、持ちもせぬ乾兒を養ふことも出來ず、乾兒の嬶や子供までが薩張乾上つて了ふ。何とか好い思案は出ないだらうかなア』

虻公『オイ蜂公、貴樣は金子が手に入ると、大風に灰撒くやうに、直にバラ〳〵と撒き散らしやがるものだから困つて了ふワ。貴樣は乾兒も少し、一人生活ぢやないか。俺のやうに有りもせぬ乾兒の十人も持ち、近所の杢平が七八人の家族を抱へてゐては到底小さい働きではやりきれない。木山の里で奪つた金子も百兩ばかりあつたが貴樣は山分けにして五十兩持つて歸つたのだから、餘程使ひでがなければならぬ。

俺達とは責任が大變違ふのだから……」

蜂公「何と云つても五十兩は五十兩だ。家内が少いと云つて五十兩が百兩に使へる道理も無し、又家内や乾兒が多いと云つても、五十兩は依然五十兩だ。減多に二十兩になる氣遣ひは無い。そんな客なことを云ふない」

虹公「其癖貴樣は可愛相に彼の娘を○○して、兩親の前でばらしたぢやないか。ヨウまあ彼んな鬼のやうな事が出來たものだ」

蜂公「ヘン俺が鬼なら貴樣も鬼だ」

虹公「鬼にも善惡があつて、貴樣のは特別製の角鬼だ、所謂雄だ。俺のは雌だから角の無い鬼だからなア」

蜂公「定つたことだ。鬼なら鬼で、何處迄も徹底的に鬼たるの本分を盡さねばなるまい

貴樣のやうに少し金子が出來ると、佛の道とか、金の道とかに逆轉しやうとする樣なことで、何うして大きな仕事が出來るものか」

と話してゐる。社務所の中より苦悶の聲、兩人の耳を刺した。

虹公「ヤア何だか妙な聲がするぢやないか」

蜂公「ほんに怪体な聲が聞えて來た。全で狼の唸り聲のやうだ。一体何物だらう。一つ調べて見たら何うだ」

虹公「おけ／＼、君子は危きに近付かずだ。幽靈か知れないぞ」

蜂公「君子が聞いて呆れるワ。貴樣のやうな惡黨が、何處の盲が見たつて君子と思ふ奴があるか。お輕さんの幽靈が貴樣達が此處へ來ると思つて、待つてゐやがるのかも知れぬぞ。何だか俺は首筋元がゾク／＼して來た。外は寒い風が吹くなり、中には

嫌らし聲が聞えるなり、遣り切れなくなつたぢやないか」

虻公「そんなチョロ臭いことを云つて居ると、貴樣と俺の名ぢやないが虻蜂取らずになつて了ふぞ。ひよつとしたら旅人が澤山金子を持つて寢てゐやがるかも知れぬぞ、山吹色の奴がウン〳〵と唸つてゐるのだらう。一つ勇氣を出して踏ん込み、ウンの正体を見屆けやうぢやないか。ひよつとしたら吾々の運の開け口かも知れぬぞ」

蜂公「うつかり遣り損ふとウンが下つて尻から出るウンにならぬやうにせよ。貴樣は何時も狼狽者だから尻の局はついた事はない。年が年中手を出しては糞垂れる奴ぢやからアハ、、、」

と笑ふ。お久は此の笑ひ聲を聞いて、待ちに待つたる二人の宣傳使の歸つたのだと早合點し、中より戸を開いて、

お久「ア、待ち兼ねました、お二人の方、早く這入つて下さい。嘸寒かつたでせう」

二人一度に、

「ヤア誰かと思へば貴方は此家の御主人か。兎も角それでは一服さして貰ひませう」

と内に入る。微な明りに映つた虻、蜂二人の顏。お久は之を眺めて、

お久「アッ、お前等は此間我が家に泊り込み、娘の生命を奪り、有金をすつかり濕へて逃げ居つた泥坊ぢやないか。サア、斯うなる以上は我が子の仇敵、モウ承知を致さぬ。覺悟をせい」

と懷劍を逆手に持つて形相凄じく、上段に構へこんだ。虻、蜂の二人は大口を開けて、

「アハ、、、」と高笑ひする。

お久「盜人猛々しいとは其方のこと。此の婆が死物狂ひの働き、覺悟を致せ、最早死ん

でも惜しうない年寄の生命だ」

と斬つてかゝる。二人は長刀をスラリと引抜き、

「サア、來い」

と腰を据ゑ、寄らば斬らんと控へて居る。お久も二人の荒武者の身構へにつけ入る隙もなく、瞬きもせず隙あらば斬りかゝらんと狙つて居る。二人はジリ〳〵と抜刀を兩手に腹の邊りに柄を握り乍ら詰め寄つて來る。

常補は發熱甚しく夢中になつて「ウン〳〵」と唸つて居る。斯かる處へ秋彦、駒彦の兩人は、歩を速めて歸り來り、駒彦先づ中へ這入つて見れば此の狀態。

駒彦「ヤア某は三五教の宣傳使駒彦と申すものだ。汝は泥坊と見受るが、老人ばかりの家にやつて來て、何を奪らうと云つたつて奪るものは有るまい。要らざることを致すより、早く此場を立去つたがよからうぞ。グヅ〳〵致して居ると、汝の利益にならぬぞ」

お久は始めて此聲に氣がつき、短刀を振かざし乍ら、

お久「悴の駒彦か、ようマア危ない處へ歸つて下さつた。……秋彦さん、何うぞ加勢して下さい。此奴が私の娘を殺し、金子を盜つて逃げた惡人で御座いますよ」

と聞いて二人は忽ち兩手を組み、滿身の靈力を籠めてウンと一聲、靈縛をかけた。二人は身構へした儘、身體强直し木像の如くになつて了ひ、眼ばかりギョロつかせて居る。

駒彦「アハ、、、、マア一寸斯うして置いて、悠くりお父さんに藥を上げ御恢復の上、此の面白い木像を慰みに御目にかけることにせう。秋彦さん、靈縛の弛まないやうに氣をつけて下さい。私はこれより父の看護を致しますから。……お母さん、危

險いところで御座いましたな」

お久は稍安堵して短刀を鞘に納め、ドッカと坐し、

お久「アーお前の歸るのがモウ一息遲かつたら、爺も婆も又もや此奴のために生命を奪らるゝところだつた」

と嬉しさ餘つて聲さへ曇つてゐる。起死回生の妙藥忽ち効驗顯はれ、常稍は俄に元氣恢復し、起き上つて二人の泥坊の姿を見、

常楠「アヽ御かげで病氣が餘程よくなつたと思へば、又しても此間出て來た大惡黨奴、刀を拔いて執念深くも吾々夫婦を附け狙うて居るのか。偖も〳〵度し難き代物だ。こんな奴は必定根の國、底の國の成敗を受けねばならぬ奴だ。想へば〳〵可愛相になつて來た、娘の仇とは言ひ乍ら何うしたものか、此奴の精神が氣の毒になつて、日頃の恨みも、腹立ちも何處かへ往つて了つた。オイ泥坊、お前も好い加減に改心をしたら何うだ。未來のほゞが恐ろしいぞよ」

泥坊は目をキョロ〳〵回轉させるばかり、唇を微に動かしたきり一言も發し得ず、固まつた儘苦悶して居る。

駒彦「お父さん、是等兩人は妹を殺した奴で御座いますか。本當に仕方のない惡人ですな。併し乍ら吾々宣傳使の神力を以てしては、此樣なもの、五人や十人は、小指の先にも當りませぬが、貴方の仰せの通り罪を憎んで人を憎まず、誠の道に歸順すれば救けてやりませうかなア……オイ泥坊、貴樣等はまだ此上惡事をやる考へか、但は今日限り薩張改心を致すか何うだ。口利く丈は靈縛を解いてやるから、直に返答致せ」

虻公は漸く重たさうに口を開いて、

虻公「ハイ、カ……イ……シ……ン……イ……タ……シ……マ……ス」

と千切れ〳〵に機械的にヤツと答へた。

駒彦「ウン、よし、それに間違ひはないなア。モウ一人の奴は何うだ、貴様も改心するか」

蜂公は機械のやうに幾度となく、頭を縦に曲線的に振つてゐる。

駒彦「ウン、よし、改心するに違ひはないな。そんなら秋彦さん、靈縛を解いてやつて下さい、万一暴れ出したら其時又靈縛をかけるまでの事だから……」

秋彦「承知しました」

と秋彦は両手を組合せ、天の數歌を一回唱へ、「許す」と一言、言靈を發射するや両人の身体は自由自在の舊に復した。二人は夕立の如き涙をボロ〳〵と落し乍ら、両手を合せ床に頭を摺つけ、懺悔の念に堪へざるもの、如く啜り泣きさへして居る。

常楠は両人の姿をツク〴〵と眺め、

常楠「コレ二人の泥坊さん、お前も生れ付いてからの悪人ではあるまい。人間と云ふものは育ちが大切だ。大抵泥坊になつたりする奴は、若い時に親に離れるか、或は繼母育ちか、繼父の家庭に育つたものが多い樣だが、お前の親は何うなつたのだ。子の可愛くない親は世界にない筈だが、何うぞして家の悴も一人前に育て上げ、世間から偉い奴だと賞めて貰ひたいのは親心、今に両親が生きてゐるならば、御心配をしてゐるであらう。今より綺麗薩張と心を入れ換へ善の道に立歸りなされや。私もお前さん等に大事の娘を殺されたが、お前にも両親があるだらう。娘の仇だと云つ

て、仇を討てば私は氣分がサラリとしやうが、お前さんの兩親が聞いたら嘸歎かつしやることだらう。之を思へばお前樣に娘の仇として、一太刀報いることも出來ぬやうになつて來た。何卒今日限り生命が失くなつたと思つて誠の心になつて下されこれが老先短き年寄の頼みだ。お前の親の代りに意見をするのだから、何卒忘れぬやうにしてお呉れ」

虹公「ハイ有難う御座います。飜然として今迄の夢が醒めました。私には親があつたさうで御座いますが、未だに分りませぬ。印南の里の森に孤に包まれ、生れた直き直き捨てられて居つたのを、情深い村人が救ひ上げて、子の無いのを幸ひに私を子として育てゝ下さつたのですが、私が六才の時に大恩ある育ての兩親は、餓の病で國替をなされまして、それから私は取りつく島も無く、乞食の群に入り漸く成人して女房を持ちましたが、子供の時より惡い事をやつて來た癖は今に直らず、好い事は一つも致したことはありませぬ。貴方の只今の御教訓は生みの親の慈悲の御言葉のやうに感じまして、心の底より有難涙が溢れます。モウ今日限り惡いことは致しませぬ」

常楠「アゝさうか〳〵、よう言うて下さつた。それで私も安心した。さうしてお前さん捨兒されたと云はつしやつたが、何か其時の印は無かつたか」

虹公「ハイ私は虹公と申して居りますが、私の肌に添へてあつた守り刀に、「常」と云ふ字が書いてあつたさうで御座います。今は擦れて字も見えなくなりましたが之を證據に生みの親を探ねんと、斯んな惡人に似合はず、始終肌身に離さず持つて居ります。何うぞして一度此世でお父さんやお母さんに會ひたいもので御座います

何しろ生れ落ちると捨兒になるやうな不運なもので御座いますから、到底此世では會ふことは出來ますまい」

と身の果敢なさを思ひ浮かべて、泥坊に似合はずワッと許り其場に泣き倒れた。

常楠は首を傾けて吐息を洩らして居る。暫らくあつて、

常楠「其の守り刀を一寸見せて下さらぬか」

虻公「サア、何うぞ御覽下さいませ」

と懐より取出し押戴いて手渡しする。常楠は手に取上げ、たいつ、すかめつ鞘を拂つてツク〳〵眺め、

常楠「擬ふ方なき我家の紋所、○に十が記してある。此刀は私の大切な、若い時からの守刀であつた。斯うなれば女房の前で白狀するが、實の所は女房の目を忍び、下女のお龍に子を姙娠せ、己むを得ず自分の知り合にお龍を預つて貰ひ、生み落したのが男の子、女房の悋氣を恐れて我が家へ連れ歸る譯にも行かず、何處の誰人かの情で育つであらうと、後の印に此の守り刀を附け、「常」と云ふ印をして置きました。ア、そんならお前は私の子であつたか。惡いことは出來ぬものだ。お前が此樣な惡人になつたのも、みんな私が天則に背いたからだ。コレ悴、赦して呉れ。何事もみんな私が惡いのだから……」

此物語に一同ハッと呆れて、常楠と虻公の顔を見較べるのみであつた。虻公は常楠に縋りつき、

虻公「ア、貴方は父上樣で御座いましたか。存ぜぬこと〻て御無禮を致し、可愛い妹まで彼んな目に會はして、誠に申譯が御座いませぬ。何うぞ重々の罪は御赦し下さ

いませ」

駒彦「そんなら私の兄弟であつたか。これと云ふのも全く神様の御引合せだ。有り難し辱なし」

と兩手を合せ、感謝の涙に沈む。

お久は又もや腕を組み思案に暮れてゐる。此態を見て常楠は、

常楠「コレ女房、怺へて呉れ。お前は今の話を聞いて大變機嫌を惡うしたやうだが、これも私の罪だ。あつて過ぎたことは何と云つても仕方が無い。これ此通りだ。赦してお呉れ」

と兩手を合せ、お久の前に頭を下げ謝らんとするを、お久は押止め、

お久「コレ〳〵親父さん、勿体ない、何を言はつしやるのだ。妾こそ貴方にお詫をせねばならぬことが御座います。妾が白狀すれば嘸貴方は愛想を御盡かしなさるでせうが、妾も罪亡ぼしに此處で懺悔を致します。人さんの前又夫や吾が子の前で、年が寄つて昔の恥は言ひたくはなけれど、天道は正直、何時まで隱して居つても罪は亡びませぬから、一應聞いて下さい」

と涙ぐみつゝ夫の顏を打看守る。

常楠「なアに夫婦の仲に遠慮は要るものか。何でも構はぬ、皆云つて呉れ。其方が互に心が解け合つて、何程愉快だか分つたものぢやない」

お久「妾は今迄隱して居りましたが、貴方の家へ嫁ぐ前に若氣のいたづらから、親の許さぬ男を持ち一人の子を生み落し、爺さんのやうに熊野の森へ捨兒を致しました。それもクリ〳〵とした立派な可愛い男の子であつた。お爺さんの捨兒に會はれたの

を見るにつけ、私の捨てた彼の兒は如何なつたであらうと思へば、立つても居ても居られなくなりました。……ア、捨てた兒よ、無殘な母と恨めて下さるな。事情があつてお前を捨てたのだから……」

と又もや泣き倒れる。蜂公は怪訝な顏をして、

蜂公「ヤア今承はれば、お婆アさんは熊野の森に捨兒をなさつたと云ふことだ。それは何年前で御座いますか」

婆は涙を拭ひ乍ら、

お久「ハイもう彼是四十年にもなるだらう。今居れば恰度お前さん位に立派な男になつて居る筈ぢや。ア、妾も其子が此世に生きて居るのなら、此世の名殘りに一度見て死にたいものだ。そればかりが冥途の迷ひだ。若い時は氣が强くて何とも思はなかつたが、年が寄ると捨兒の事を心に思はぬ間はありませぬ。さうしてお前さん、其の捨兒の事に就て御聞き及びの事はありませぬか」

蜂公「ハイ別に何とも聞いては居りませぬが、私は熊野の森に捨てられて居つたのを或山賊の親分が見つけて、私を大臺ケ原の山砦に伴れ歸り、立派に成人させて呉れました。私が十八才になつた時、三五教の宣傳使がやつて來て、岩窟退治を致した時に生命からく其處を脱け出し、それから諸方に彷徨ひ、女房を持ち相變らず泥坊をやつて居りました。最前から貴方の御話を聞くにつけ、何たか貴方が母上のやうに思はれてなりませぬ」

お久は、

お久「其時に何か印は無かつたかな」

蜂公「ハイ、私は水兒の時に捨てられたので何も存じませぬが、他の話に聞けば守り刀が附いて居つたさうです。併し其守り刀も大臺ケ原の崩竄の騒動の時に取り落しました。それには蜂の印が入つて居つたさうで、私を蜂々と呼ぶやうになつたと聞いて居ります」

お久は飛びつく許りに驚いて、

お久「アヽそれ聞けばてつきり我が子に間違ひありませぬ。何とした嬉しい事が一度に出て來たものだらう。コレ〳〵親父どん、此子は貴方に嫁ぐ迄の子でありますから何うぞ赦して下さい。今迄包んで居つた罪も何うぞ今日限り赦すと仰有つて下さい御願ひで御座ります」

と夫に向つて手を合し賴み入る。

常楠「そんなことは相身互だ。罪人同士の寄合ひだから、モウこれ限り今迄の事は川へ流し、改めて二人の子が分つた喜びの御禮を此處で神樣に奏上し、明日は早く此處を立去つて熊野へ御禮に參りませう」

一同は涙混りに秋彥の導師の許に、感謝祈願を覺束無げに奏上し了つた。東の空は茜さし、金色の燦然たる太陽は、晃々と海の彼方より昇らせ給ふ。

（大正一一・六・一一　舊五・一六　外山豊二錄）

第八章　縺れ髪（七二〇）

木山彦の一行は漸くにして熊野の瀧に衣類を脱ぎすて、夫婦は此處に何事か祈願を凝らし七日七夜を送つた。從者の助公は木山彦の命に依り直ちに歸郷し、木山彦の不在を守る事となつた。

此處に夫婦は一心不亂になつて、今一度我子の鹿公に會はせ給へと祈つて居る。三七二十一日の水行を了へた夜半頃、何處ともなく山奥の谷を響かせ馬の蹄の音勇ましく、此方に向つて中空を駈來る異樣の神人、七八人此場に現はれ、夫婦に向ひ、

神人『汝は日高の庄の會長にて木山彦夫婦であらう。汝が熱誠なる祈願を聞き屆け、一人子の鹿公に遇はしてやらう程に、夫婦共前非を悔い、今迄なし來りし天則違反の罪を我前に自白せよ』

と言葉嚴しく言ひ渡し、鏡の如き目を光らし、白馬に跨つた儘兩人の顏を睥睨して居る扈從の神と見えて六七人は稍小さき馬に跨り各手槍を携へて居る。夫婦は戰慄き恐れ『ハイ』と許りに平伏した。

木山彦『私は壯年の頃或一人の女と夫婦の約束を結び、子迄成したる仲を無慘にも振り捨てゝ、今の女房を持ちました。惡い事と申せば私一代に是より外に覺えは御座いませぬ。其報いにや、二人の娘は人身御供に取られ、一人の忰は繼母が來たので何時の間にか、幼少の頃我家を飛び出して行方は更に分らず、年は追々寄つて來る、世の中の寂寥を感じ、面白からぬ憂き年月を送る折しも其忰に邂逅ひ、半時の間も待たず言葉一つ云ひ交さず、又もや龍神の宮の犧牲に取られて仕舞ひましたの

も、全く神様の冥罰が當つたので御座いませう。何卒其子に遇はして下さるやうと夫婦の者がお願ひに參つたので御座います。今では女房も年を取り、繼子が歸つたとても餘り辛くは當りますまいから、も一度遇ひ度う御座います。承はれば、我子は宣傳使となつて龍神の宮の惡神を平げ、世界を遍歴して居るさうで御座います何卒々々今迄の深き罪をお赦し下さいまして、哀れな老夫婦に今一度面會をさせて下さいませ」

と涙ぐむ。異樣の神人は言葉爽かに、

神人「如何にも汝の申す通り寸分の間違ひはない。汝の女房木山姫も隨分繼子に辛く當つたものぢや。併し乍ら最早今日は餘程心も柔ぎ居れば、親子の再會を許して遣はす。必ず〳〵神信仰を忘るな」

木山姫はハツと平伏し、涙と共に去し昔の懺悔話を語り出した。

木山姫「今日迄夫にも隱して居りましたが、神樣は何も彼もよく御存じで御座いますから、包み隱さず一伍一什を神樣の御前、夫の前に白狀致します。妾は若氣のいたづらから一人の男を拵へ腹が膨れ、遂には親の許さぬ子を設け、種と云ふ男に產子を渡し其儘姿を隱し、今の夫に娶られたもので御座います。ア、其子は今何うして居りませうか、もし此世に成人して居ますなら、神樣のお慈悲で一目遇はして頂きたう御座います」

と涙と共に賴み入る。木山彥は妻の物語を聞いて今更の如く呆れて居る許りであつた。

馬上の神人はニコ〳〵しながら、

神人「汝の遇ひ度しと思ふ子は、今に遇はしてやらう。必ず信仰を忘るな」

と言葉終ると共に一同の神の姿は掻き消す如く消え失せて仕舞つた。

斯る所へ常楠夫婦を始め秋彦、駒彦、虻公、蜂公い六人連は、此瀧に身を清めんと夜中に闇を冒して出で來り、忽ち逼裸となり瀧水に身を清め、天津祝詞を奏上した。木山彦は夜陰の事とて一行の何人なるか氣が付かなかつた。唯熱心なる信仰者とのみ思ひつめ、夫婦は一生懸命に祈願の祝詞を夜の明くる迄、大地に平伏して奏上して居た。

夜は漸うに明け離れ、一同の顏はハツキリとして來た。

木山彦『オ、其方は常楠夫婦では御座らぬか、ヤア、秋彦、駒彦の宣傳使殿、これは〳〵よい所でお目に懸りました。突然ながら、秋彦の宣傳使は私の悴で御座る。ようまア無事で居て呉れた。龍神の宮の神を征服げると云ふ神力を備へて居るとは實に偉いものだ』

と涙をホロリと零す。秋彦は藪から棒の此言葉を少しも訝かる色なく、

秋彦『ア、貴方が父上で御座いましたか、ようまあ達者で居て下さいました』

と人目も構はず木山彦に抱きつき、嬉し涙に掻き暮れて居る。

常楠『此間から合點の往かぬ事のみ突發して、彼方からも此方からも親子の對面ばかり我々夫婦は三人の子を發見致しました。之も全く大神樣のお引き合せ、酋長殿も大切なお息子に御面會遊ばして、こんな大慶な事は御座いませぬ』

と涙を流し祝意を表する。秋彦、駒彦、虻公、蜂公四人は無言の儘手を合せ、瀧水に向つて『熊野大神樣、有り難く御禮申上げます』と心の中で祈願を籠めて居る。

此時何處ともなく麗はしき雲起りて四邊を包み、忽然として現はれた一柱の女神、言葉淑やかに宣り給ふやう、

女神『秋彦、駒彦兩人が至誠に免じ、神界より親子の對面を許したのであるぞよ。今改めて汝等に告げん。駒彦は常楠、お久の二人の中より生れた子である。又秋彦は木山彦とお久との間に生れた子である。次に虻公は常楠と木山姫との中に生れた子である。次に蜂公は木山彦とお久との中に生れた子である。何れも皆天則違反のいたづらより生れ出し御子なれば、神界の罪に依りて今日迄親子互に顔を知らず、親は子を探ね、子は親を探ねつゝあつた。されど汝等が信仰の力に依つて各罪を赦され親子の對面をなす事を得たのである。夢々疑ふ事勿れ。我は天敎山より下り來れる木花姫命なるぞ』

と宣り終へ給ひて、微妙の音樂に送られ崇高なる御姿は煙の如く消え給ふ。

四邊を包みし麗はしき雲はさつと晴れて、さしもに高き那智の瀧の落つる音、滔々と轟き渡り、瀧の飛沫に各日光映じ、得も云はれぬ麗はしき光景となつた。一同は神恩を感謝し、茲に水も漏らさぬ親子の緣を喜びつゝ、若彦館を指して進み往く。

惟神霊幸倍坐世。

（附記）

木山彦―お久……秋彦（鹿）遁兒、六才、繼母

常楠（種）―お久……駒彦（馬）失兒、三才、天狗

常楠―木山姫（おたつ）……虻、捨兒、水兒、一才

木山彦―お久……蜂、水兒、一才

（大正一一・六・一一　舊五・一六　加藤明子錄）

平和なる人の家庭は現世(うよ)の
まゝ天國の姿なりけり
大本の教の源尋ぬれば
たゞ愛善の光なりけり
常立に浦安國と治め行く
神のこころは愛の善なり

第三篇　有耶無耶

第九章　高姫騒（七二）

若彦の門を潜つて入り來る一人の美人があつた。門番の秋公、七五三公の兩人は此姿を見て、

秋公『モシ〳〵、何處のお女中か知りませぬが、何の御用で御座るか、門番の私に一應御用の趣を聞かして下さいませ』

女『少しく樣子あつて……兎も角主人に會ひ度う御座いますから』

七五三公『名も分らぬ女を通す事は罷り成りませぬ』

女『お前は此處の門番ではないか、妾が如何なる者か分らぬ樣な事で、門番が勤まりますか』

とたしなめ乍ら、足早やに奥深く進み入つた。

七五三公『ア、薩張駄目だ、女と言ふ奴は押し尻の強いものだ。然し彼奴は何處ともなしに氣品の高い女であつたが一体何だらうかなア』

秋公『ひよつとしたら大將のレコかも知れぬぞ』

と小指を出して見せる。

七五三公『當家の大將に限つてそんな者があつて堪らうかい。玉能姫樣と言ふ立派な奥樣があるのだが、今は再度山の麓の生田の森に、三五敎の館を建て、熱心に活動して居られると言ふ事だ。御夫婦は遙々國を隔て、忠實に御神業を爲さると言つて、大變な評判だから、そんな事があつて堪るものか』

秋公『さうだと言つて思案の外と言ふ事がある。ひよつとしたら玉能姫さんが御入來になつたのぢやあるまいかな』

七五三公『馬鹿を言へ、玉能姫樣がどうして一人お入來になるものか。少なくとも一人や二人のお供は、屹度從いて居らねばならぬ筈だ』

秋公『そこが……微行と言ふ事がある。きつと大將が戀しくなつて、御微行と出掛けられたのだらう』

と門番は美人の噂に有頂天になつて居る。

美人は奥深く進み入り玄關先に立ち、小聲になつて、

女『若彦樣は御在宅で御座いますか』

と訪うた。玄關番の久助は此聲に走り出で、

久助『ハイ若彦の御主人は今奥に居られます。誰方で御座いますか、御名を聞かして下

さいませ」

女「少しく名は申し上げられぬ仔細が御座います。お會ひ申しさへすれば分りますから何卒「女が一人お訪ねに參つた」と傳へて下さいませ」

久助「私は姓名を承はらずにお取次を致しますること、大變に叱られますから、何卒名を言つて下さい、さうでなければお取次は絶對に出來ませぬ」

女「左樣なれば妾から進んでお目に掛るべく通りませう」

久助「是は怪しからぬ事を仰有る。此處は私の關所、さう無暗に通る事は罷りなりませぬ」

女「左樣なれば取次いで下さいませ」

久助「見れば貴女は相當の人格者と見えるが、私の言ふ事が分りませぬか。玄關番は玄關番としての職責を守らねばなりませぬから、何程通して上げ度くとも、姓名の分らない方は化物だか何だか知れませぬ。氣の毒乍ら何卒お歸り下さいませ」

美人は稍聲を高め、

女「コレ久助、お前はまだ聖地に上つた事も無く、生田の森へ來た事も無いので分らぬのも無理はないが、名を名告らずとも玄關番をして居る位なら、大抵分りさうなものだ。何と言つても妾は通るのだから邪魔をして下さるな」

久助は首を傾げ、

久助「ハテナ、貴女は奥樣では御座いませぬか。ア、いや〳〵奥樣ではあるまい。尊き玉能姫樣は結構な御神業を遊ばして、今では女房とは言ひ乍ら、格式がズツと上に

なられ、當家の御主人樣も容易にお側へ寄れないと言ふ事だ。そんな立派な方が供を連れずに、輕々しく一人御入來遊ばす道理が無い。ア、此奴は、てつきり魔性のものだ。……こりや〳〵女、絶對に通る事は罷りならぬぞ」

と大聲に呶鳴りつけた。若彦は久助の大聲に何事の起りしかと、座を起つて此場に現はれ來り、美人の姿を見て打ち驚き、

若彦「ア、お前は玉……」

と言ひかけて俄に口をつぐみ、見直つて、

若彦「何れの女中か存じませぬが、何卒奥へお通り下さいませ」

女「ハイ、有り難う御座います。御神務御多忙の中を御邪魔に上りまして、誠に御迷惑樣で御座いませう。左樣なればお言葉に從ひ、奥に通して頂きませう」

若彦「サア私に從いて御入來なさいませ。コレ久助、お前は此處にしつかりと玄關番をして居るのだよ、一歩も奥へ來てはいけないから」

と言ひ捨てゝ兩人は奥の間に姿を隱した。後見送つた久助は首を稍左方に傾け舌を斜に嚙み出し、妙な目付をして合點の往かぬ面持にて天井を眺めて居る。若彦は奥の間に女と二人靜かに座を占め、

若彦「貴方は玉能姫殿では御座らぬか。大切な御神業に奉仕し乍ら、何故案内も無く一人で此處へお入來になりましたか。私は神樣へ誓つた以上、貴女と此館で面會する事は思ひも寄りませぬ」

玉能姫「お言葉は御尤もで御座いますが、之には深い仔細があつて參りました。貴方の御存じの通り、言依別樣より大切な神業を命ぜられ、次で生田の森の館の主人とな

りましたが、それに就いて高姫さんの部下に仕へて居る人達が「三個の神寶は、屹度妾と貴方とが申し合せ當館に隠してあるに相違ないから、若彦の生命をとつてゞも、其神寶の所在を白狀させねばならぬ」と言つて、大變な陰謀を企てゝ居りますから、妾もそれを聞いて心落ち付かず、何にも御存じの無い貴方に御迷惑を掛けては、妻たる妾の責任が濟むまいと思つて、長途の旅を只一人忍んで御報告に參りました」

若彦『左樣で御座つたか。それは御親切に有難う御座います。然し乍ら何事も神樣に任した私、假令高姫が如何なる企みを以て參りませうとも、神樣のお力に依つて切り拔ける覺悟で御座います。何卒御安心の上、休息なされたら一時も早くお歸り下さいませ。万一此事が他に洩れましてはお互の迷惑「若彦、玉能姫は立派な者だと思つて居たのに、矢張人目を忍んで夫婦が會合して居る」と言はれてはなりませぬから、敎主のお許しある迄は絶對にお目に掛る事は出來ませぬ。その代り私も何處までも獨身で道を守つて居りますから、御安心下さいませ』

玉能姫『貴方に限つて左樣な氣遣ひは要りますものか。互に心の裡は信用し合つた仲ですから、決して〳〵左樣なさもしい心は起しませぬ。御承知で御座いませうが何れ遠からぬ中、高姫さんか、又は部下の方々が食物を以て見えませうから、決してお食りになつてはなりませぬ。是だけは特にお願ひ致して置きます』

若彦『ハイ、有り難う御座います、何から何まで御注意下さいまして御親切の段、何時迄も忘却致しませぬ』

玉能姫は嬉し氣に若彦の言葉を聞いて笑顔を作り、嬉し涙を滲ませて居る。

斯かる處へ玄關に當つて爭ひの聲おい〳〵高くなつて來る。二人は何事ならんと耳を澄ませ聞き入れば、高姫の肝聲として、

高姫の聲『此處へ玉能姫が來たであらう』

久助の聲『イヤ〳〵決して〳〵女らしい者は一人も來ませぬ。此館は御主人の命令に依つて當分の間、女は禁制で御座る』

高姫の聲『何と言つて隱してもチヤンと門番に聞いて來たのだ。女が一人此處へ這入つて來た筈だ、上も下も心を合せ、しやうも無い女を引き摺り込み、体主靈從のありたけを盡し、表面は誠らしく見せて居る若彦の企みであらう。彼奴は青彦と言つて妾が育てゝやつた男だ。エー、通すも通さぬもあるか、言はゞ弟子の館に師匠が來たのだ。邪魔致すな』

と呶鳴り立て久助の止むるを振り拂ひ、三四人の男を玄關に待たせ置き、疊を足にて強く威喝させ乍ら若彦の居間に進み來り、

高姫『オホ、、、、若彦さん、惡い處へカシヤ婆が參りまして誠に御迷惑樣、折角意茶つかうと思ひなさつた處を、風流氣の無い皺苦茶婆が這入つて來て、折角の興を醒ましました。お前さんは羊頭を掲げて狗肉を賣る山師の樣な宣傳使ぢや。玉能姫殿此高姫の眼力に違はず、表面は立派な事を……ヘン……仰有つて言依別の教主を誤魔化して御座つたが、今日の醜態は何で御座いますか。貴方の御身分で一人の供も連れずに、大切な神業を遊ばす夫の側へ忍んで來るとは、實に立派な貴方の行ひ、高姫も實に感心致しました。本當に凄いお腕前、爪の垢でも煎じて頂き度う御座いますワ。オホ、、、』

若彦『これは〳〵高姫樣、遠方の所ようこそいらせられました』

高姫『よう來たのでは無い、惡く來たのですよ。お前さんも氣持良く樂しまうと思つて居た處へ、皺苦茶婆アがやつて來て、折角の樂しみを滅茶々々にされて胸が惡いでせう。月に村雲、花には嵐、世の中は思ふ樣には往きますまいがな。西は妹山、東は背山、中を隔つる高姫川、本當に惡い奴が出て參りました。コレ〳〵玉能姫さん耻かし相に赭い顏して何ぢやいな。阿婆摺女の癖に、殊勝らしう見せようと思つてそんな芝居をしても、他のお方は誤魔化されませうが、此高姫に限つて其手は喰ひませぬぞエ。「その手でお釋迦の顏撫でた」と言ふのはお前さんの事だ。ア、ア怖い〳〵。こりや一通りの狸ではあるまい。愚圖々々して居ると高姫の睾丸……オットドッコイ……膽玉まで抜かれますワイ』

玉能姫『これは〳〵高姫樣、遠方の處御苦勞樣で御座いました。今承はれば貴方は色色と我々夫婦の事に就いて、誤解をして居らつしやいますが、決して左樣な考へを以て來たのでは御座いませぬ』

高姫『そんな事は今々の信者に仰有る事だ。蹴爪の生えた高姫には、根つから通用致ませぬワイなア』

と小面憎氣に顧をしやくつて見せる。玉能姫は返す言葉も無く迷惑相に俯向いて居る。

高姫『コレ、玉能姫さん、イヤお節さん、惡い事は出來ますまいがな。誠水晶の生粹の日本魂ぢやと教主が見込んで、大切な御神業を言ひ付けられた貴女の精神が、さうグラ付く樣な事では如何なりますか。妾は是から貴女の夫婦會合を實地に目擊した證據人だから、三五教一般に報告致しまして信者大會を開き、お前さんの御用を

取上げて仕舞はねば、折角大神樣の三千年の御苦勞も水の泡になります。サア如何ぢや、返答をしなされ。三ツの玉は何處へ隱してある。それを聞かねば、お前さんの樣なグラ〳〵する瓢簞鯰には祕密は守れませぬ。サア玉能姫さん、若彥さん、夫婦共謀してドハイカラの言依別を誤魔化して居つたが、最早化けの現はれ時、何と言つても高姫が承知しませぬぞエ。一般に報告されるのが苦しければ……魚心あれば水心ありとやら……此高姫も血もあれば淚もある。決してお前さん達の御迷惑を見て、心地よいとは滅多に思ひませぬ。サア玉能姫さん、お前さんはチツと妾の言ひ樣が强うて腹も立つてあらうが、そこは神直日大直日に見直し聞き直して、御神寶の所在を妾にソツと言つて下さい。さうすればお前さん等夫婦のアラも分らず、妾も亦誠の御神業が出來て結構だから」

玉能姫「妾は一度教主樣から玉はお預り致しましたが、不思議な方が現はれて遠い國へ持つて行かれましたから、實際の事は何處に隱されてあるか、妾風情が分つて堪りますか。又假令知つて居りましても、三十萬年の間は口外は出來ない事になつて居りますから、それ許りは如何仰有つても申し上げられませぬ。何卒貴女の天眼通と日の出神の御守護とで、玉の所在を御發見なさるが宜しう御座いませう」

高姫「エー、ツベコベと小理窟を言ふ方ぢやなア。そんな事を勿体ない、日の出神に御苦勞を掛けたり、天眼通を使うて堪りますか。お前さんが只一言「斯う〳〵ぢや」と言ひさへすれば良いぢやないか」

若彥「現在夫の私にさへも仰有らぬのですから、何程お尋ねになつても駄目ですよ」

高姫「エー、お前までが横槍を入れるものぢやない。夫婦が腹を合して隱して居るので